広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集

須賀谷古墳群・畳谷東遺跡発掘調査報告書

１９８５

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集
須賀谷古墳群・畳谷東遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁・行	誤	正
背表紙	発掘調査報告書	発掘調査報告書
43頁第6表	第28図25　口径	第28図25　口径27.6
43頁第6表	第28図25　頸径	第28図25　頸径25.3
44頁第6表	第33図1	第32図1
47頁第6表	第36図12　色調黄褐色～淡	第36図12　色調淡黄褐色
48頁第6表	第38図1　痕跡をとど	第39図1　痕跡
49頁第6表	第39図3　(14～15条1cm)	第39図3　(14～15条／cm)
奥　付	たたみひがし	たたみだにひがし

例　　言

1．本報告書は，昭和59年４月～５月に実施した安芸府中有料道路建設事業に係る須賀谷古墳群・畳谷東遺跡（広島市東区温品所在）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，広島県道路公社から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．遺構の実測・写真撮影は，三枝健二・辻満久・妹尾周三・梅本健治及び調査補助員の船井向洋が，遺物の実測は，辻・船井・梅本が，遺物の写真撮影及び実測図のトレースは梅本が行った。

4．本書は，梅本が執筆・編集した。

5．本書に使用した遺構の表示記号は，次のとおりである。

　　ＳＢ：住居跡，ＳＫ：土坑，ＳＰ：主柱穴，ＳＸ：性格不明遺構

6．図版と挿図の遺物番号は同一である。但し，図版の遺物番号は次のように略号化した。

　(例)　27－１…第27図１を示す

7．本書に用いた方位はすべて磁北である。

8．第１図は，建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図（上深川，海田市）を使用した。

9．「須賀谷第１号古墳」は，本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」『芸備地方史研究』第34号　昭和35（1960）年の「須賀谷古墳」と同一の古墳である。また，本古墳は文化庁『全国遺跡地図　広島県』　昭和57（1982）年等で「清水谷古墳」の名称が用いられているが，今後は「須賀谷第１号古墳」に統一したいので，関係各位の御協力をお願いする次第である。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 2

Ⅲ　須賀谷古墳群 …… 5

Ⅳ　畳谷東遺跡 ……23

挿図目次

第１図　須賀谷古墳群・畳谷東遺跡周辺遺跡分布図（１：25,000）…… 3
第２図　須賀谷古墳群周辺地形図（１：2,000）…… 5
第３図　須賀谷古墳群地形測量図（１：400）…… 6
第４図　須賀谷古墳群墳丘遺存図（１：200）…… 7
第５図　須賀谷古墳群墳丘断面図（１：80）…… 8
第６図　須賀谷第１号古墳周溝内出土土器実測図（１：３）…… 9
第７図　須賀谷第１号古墳主体部実測図（１：40）……10
第８図　須賀谷古墳群ＳＫ１実測図（１：40）……11
第９図　須賀谷古墳群ＳＫ２実測図（１：40）……11
第10図　須賀谷古墳群ＳＫ２出土鉄器・金環実測図（１：２）……12
第11図　須賀谷古墳群ＳＫ２出土玉類実測図（１：１）……13
第12図　須賀谷古墳群ＳＸ３実測図（１：60）……14
第13図　須賀谷第２号古墳第１主体部実測図（１：40）……16
第14図　須賀谷第２号古墳第１主体部出土玉類実測図（１：１）……18
第15図　須賀谷第２号古墳第２主体部出土鉄器・玉類実測図（１：２，１：１）……19
第16図　須賀谷第２号古墳第２主体部実測図（１：40）……20
第17図　須賀谷古墳群ＳＫ４実測図（１：40）……20
第18図　畳谷東遺跡周辺地形図（１：2,000）……23

第19図　畳谷東遺跡遺構配置図(１：200) ……24
第20図　畳谷東遺跡土層断面図(１：80)……25
第21図　畳谷東遺跡ＳＢ１・ＳＢ２実測図(１：60)……26
第22図　畳谷東遺跡ＳＢ３・ＳＢ４実測図(１：60)……27
第23図　畳谷東遺跡ＳＢ５出土土器実測図(１：３)……28
第24図　畳谷東遺跡ＳＢ５実測図(１：60)……29
第25図　畳谷東遺跡ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８実測図(１：60)……30
第26図　畳谷東遺跡ＳＢ９・ＳＢ10実測図(１：60)……31
第27図　畳谷東遺跡ＳＢ９出土土器実測図(１：３)……32
第28図　畳谷東遺跡ＳＢ９・ＳＢ10出土土器実測図(１：３)……33
第29図　畳谷東遺跡ＳＫ11実測図(１：40)……34
第30図　畳谷東遺跡ＳＫ12実測図(１：40)……34
第31図　畳谷東遺跡ＳＫ13実測図(１：40)……35
第32図　畳谷東遺跡ＳＫ13出土土器実測図(１：３)……36
第33図　畳谷東遺跡出土鉄器実測図(１：２)……36
第34図　畳谷東遺跡ＳＸ14実測図(１：60)……36
第35図　畳谷東遺跡ＳＸ14出土土器実測図(１：３)……37
第36図　畳谷東遺跡調査区出土土器実測図(１)(１：３)……38
第37図　畳谷東遺跡調査区出土土器実測図(２)(１：３)……39
第38図　畳谷東遺跡調査区出土石器・土製品実測図(１：２)……39
第39図　畳谷東遺跡周辺出土土器実測図(１：３)……40

図　版　目　次

図版１ａ　須賀谷古墳群遠景(南より)
　　ｂ　須賀谷古墳群全景(調査前，南より)
図版２ａ　須賀谷第１号古墳全景(調査後，東より)
　　ｂ　須賀谷第１号古墳周溝断面(南より)
図版３ａ　須賀谷第１号古墳主体部(北より)
　　ｂ　須賀谷古墳群ＳＫ２(西より)
図版４　須賀谷第１号古墳出土遺物
図版５ａ　須賀谷古墳群ＳＫ１(北より)

b　須賀谷古墳群ＳＸ３(南より)
図版６ａ　須賀谷第２号古墳全景(調査後，東南より)
b　須賀谷第２号古墳周溝断面(西より)
図版７ａ　須賀谷第２号古墳第１主体部(北より)
b　同上玉類出土状況(北より)
図版８ａ　須賀谷第２号古墳第２主体部(南より)
b　同上鉄刀子出土状況(南より)
図版９ａ　須賀谷古墳群ＳＫ４(北より)
b　須賀谷第２号古墳出土遺物
図版10ａ　畳谷東遺跡遠景(西より)
b　畳谷東遺跡近景(調査前，西より)
図版11ａ　畳谷東遺跡ＳＢ１～ＳＢ５(西より)
b　畳谷東遺跡ＳＢ１・ＳＢ２(東南より)
図版12ａ　畳谷東遺跡ＳＢ３・ＳＢ４(西より)
b　畳谷東遺跡ＳＢ５・ＳＫ12(西より)
図版13ａ　畳谷東遺跡ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８(西より)
b　畳谷東遺跡ＳＫ11(南より)
図版14ａ　畳谷東遺跡ＳＢ９・ＳＢ10(西より)
b　畳谷東遺跡ＳＫ13(西より)
c　畳谷東遺跡ＳＸ14(北より)
図版15　畳谷東遺跡出土遺物(１)
図版16　畳谷東遺跡出土遺物(２)
図版17　畳谷東遺跡出土遺物(３)

表　目　次

第１表　須賀谷古墳群出土小玉類型一覧表……13
第２表　須賀谷古墳群ＳＫ２出土小玉分類表……14
第３表　須賀谷古墳群ＳＫ２出土小玉計測表……15
第４表　須賀谷第２号古墳第１主体部出土小玉計測表……17
第５表　須賀谷第２号古墳第１主体部出土小玉分類表……19
第６表　畳谷東遺跡出土土器観察表……41～49

I はじめに

本発掘調査は，広島市東区馬木四丁目から安芸郡府中町鶴江二丁目に至る安芸府中有料道路建設事業に係るものである。この安芸府中有料道路は，県道広島中島線のバイパスとして建設されるもので，山陽自動車道と広島市の中心部を結ぶ都市環状道路の一環として，長年にわたって慢性化しているこの地区の交通渋滞の解消および生活環境の改善に寄与することはもとより，賀茂学園都市・東部流通団地・県立広島緑化植物公園等の整備に伴って生じる将来の自動車交通量の増加に対応し，地域経済の発展に寄与しようとするものである。

昭和56（1981）年6月，広島県道路公社（以下「道路公社」という。）から広島市教育委員会（以下「市教委」という。）に，安芸府中有料道路建設事業予定地内の埋蔵文化財の有無並びに取扱いについて照会があった。市教委では，事業予定地内の分布および試掘調査を実施し，弥生時代後期の集落跡（畳谷東遺跡）を確認した旨，昭和58年8月道路公社に回答した。この遺跡の以後の取扱いについては，広島県教育委員会（以下「県教委」という。）がひきつぎ，道路公社との間で協議を重ねたが，現状保存は困難であるとの結論に達したため，同年9月県教委は道路公社に対して工事着手前に発掘調査を実施する必要がある旨通知した。道路公社は，これをうけて同年10月，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査を依頼した。一方，須賀谷古墳については，周知の古墳であるため，県教委では現状保存を前提として道路公社と再三協議を行なったが，設計変更が不可能であるため現状保存は困難であるとの結論に達したため，昭和59（1984）年3月県教委は道路公社に対して，工事着手前に発掘調査を実施する必要がある旨通知した。道路公社はこれをうけて同年3月センターに須賀谷古墳の発掘調査を依頼した。同年4月，センターは道路公社との間で畳谷東遺跡・須賀谷古墳発掘調査の委託契約を締結し，昭和59（1984）年4月9日～5月25日の約2か月間，両遺跡の発掘調査を実施した。本報告書は，この畳谷東遺跡・須賀谷古墳群の発掘調査の成果をまとめたものであり，当地域研究の新たな資料として広く活用されれば幸いである。

なお，須賀谷古墳については当初1基のみを調査対象としていたが，調査の進展のなかで第2号古墳を確認したため，第1号古墳とともに計2基の発掘調査を行った。よって，以後の記述に際しては，「須賀谷古墳群」を遺跡名として使用する。

調査にあたっては，広島市教育委員会，広島県道路公社及び地元の方々から多くの協力を得た。記して謝意を表したい。

II 位置と環境

広島市東区温品(ぬくしな)は，市中心部の東北東約6㎞に位置し，旧安芸郡安芸町に属する。付近には，北西側に連なる木ノ宗山(標高413m)・二ヶ城山(標高483m)などの山塊と，南東側からせまる呉婆々宇(ごばばう)山塊（標高682m）とにはさまれて，北東一南西方向の断層谷が走っており，この幅わずかに500～1,200mの狭隘な断層谷の中央を，馬木あたりを分水嶺にして，北に小河原川，南に府中大川（通称温品川）の二河川が流下している。温品地区は，南流して太田川デルタの東縁を流れる猿猴川に注ぐこの府中大川沿いの狭隘な谷がその幅をひろげはじめる辺りにある。太田川デルタが未発達で現在よりも広島湾が奥に入りこんでいた古代にあっては，近くを古代山陽道が通っていたことと併せ，水陸交通の要衝であったことは否定できない。また，県西部でも有数の遺跡集中地域である太田川下流域に近いことを併せ考えれば，古来温品地区は，府中・矢野・海田地区などと共に広島湾東部沿岸域でも政治的・経済的に重要な位置にあったであろうことは想像に難くない。以下においては，温品地区を中心に太田川下流東岸域～広島湾東部沿岸域の主要遺跡について，時代ごとに概観していきたい。

縄文時代　比高20mの独立丘陵上にある早稲田神社遺跡[1]は，縄文早期の押型文土器，磨製石斧を出土している。また，後期後半～晩期の土器を出土する県史跡比治山貝塚[2]，晩期の土器を出土する中山貝塚[3]（第1貝層）などがある。

弥生時代　丘陵先端部に立地する中山貝塚は，縄文晩期～弥生中期の5枚の貝層をもち，特に前期後半の第3貝層からは多くの弥生土器・石器・骨角製品などが出土している。後期になると，広島湾岸・太田川下流域でも遺跡が増大し，その多くは貝塚を伴っている。なかでも，真亀(まがめ)遺跡群[4]，上深川(かみふかわ)遺跡[5]，西山258m貝塚[6]などは著名である。温品地区周辺では，畳谷(たたみだに)東遺跡の下方尾根上に立地する県史跡畳谷遺跡[7]をはじめ，標高50～200mのなだらかな尾根上・丘陵斜面に，森垣内(もりがいち)貝塚・平林貝塚・塔ノ丘貝塚・天王貝塚などが立地している。

古墳時代　太田川下流域は，県西部でも有数の古墳密集地域であり，特に竪穴式石室・箱式石棺を内部主体とする前期古墳が比較的多く存在する。中小田(なかおだ)第1号古墳[8]は，吾作銘三角縁四神四獣鏡を出土し，竪穴式石室を内部主体とする県内最古の古墳で，4世紀後半の成立とされる。後続する古墳としては，太田川西岸の神宮山第1号古墳(4世紀代)，宇那木山(うなぎやま)第2号古墳(5世紀前半)，太田川東岸の上小田(かみおだ)古墳[9]（5世紀中葉）などがあり，前二者は竪穴式石室を，後者は箱式石棺を内部主体とする。また，横穴式石室をもつ後期古墳としては，後谷古墳，惣田古墳がある。

古代　古代山陽道の安芸駅館跡と推定される下岡田遺跡[10]では，計6次にわたる調査で，奈良後期～平安初期を中心とした時期の掘立柱建物跡4棟などが検出され，重圏文軒丸瓦・緑釉陶器・灰釉陶器・木簡などが出土している。このほか，貝層中から平安中期の須恵器・緑釉陶器などが出土した城山北貝塚[11]がある。

第１図　須賀谷古墳群・畳谷東遺跡周辺遺跡分布図（１：25,000）

１．畳谷東遺跡　２．畳谷遺跡　３．永町山城跡　４．北谷山城跡　５．森垣内貝塚
６．屋太山城跡　７．須賀谷古墳群　８．中山貝塚　９．下岡田遺跡　10．城山北貝塚

中世　該期の遺跡としては，前出の下岡田遺跡で掘立柱建物跡4棟が検出されているほかは，金子氏（のち温科氏）の居城とされる永町山城跡をはじめ，屋太山城跡・北谷山城跡などの山城跡がある。

（註）

（1）　潮見浩「広島市牛田早稲田山遺跡の発掘調査報告」『広島考古研究』2　昭和35（1960）年。

（2）　松崎寿和「広島市比治山貝塚」『広島県史蹟名勝天然記念物調査報告』6　昭和26（1951）年。

（3）　松崎寿和・潮見浩「広島県中山遺跡」『日本農耕文化の生成』　昭和36（1961）年。

（4）　広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』　昭和52（1977）年。

（5）　潮見浩「広島県安佐郡高陽町上深川遺跡」『弥生式土器集成(一)』　昭和33（1958）年。

（6）　藤田等「巴形銅器を出土した西山貝塚調査概報」『日本考古学協会昭和40年度大会研究発表要旨』　昭和40（1965）年。
川越哲志ほか「広島市西山貝塚の第二次調査」『史学研究』119　昭和47（1972）年。

（7）　広島県教育委員会「畳谷遺跡」『広島県文化財調査報告』第14集　昭和58（1983）年。

（8）　広島市教育委員会『中小田古墳群』　昭和55（1980）年。

（9）　本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究』2　昭和35（1960）年。

（10）　府中町教育委員会『府中町下岡田古代建築群報告第一集第一次発掘概報』昭和38（1963）年。ほか

（11）　府中町教育委員会『城山北貝塚』　昭和51（1976）年。

参考文献

広島市役所『新修広島市史』第1巻総説篇　昭和36（1961）年。
安芸町『安芸町誌』上巻　昭和48（1973）年。
安芸郡府中町『安芸府中町史』第1巻通史篇　昭和54（1979）年。
広島市教育委員会『山城』　昭和57（1982）年。
西本省三・葛原克人編『日本城郭大系　第13巻　広島・岡山』　昭和55（1980）年。

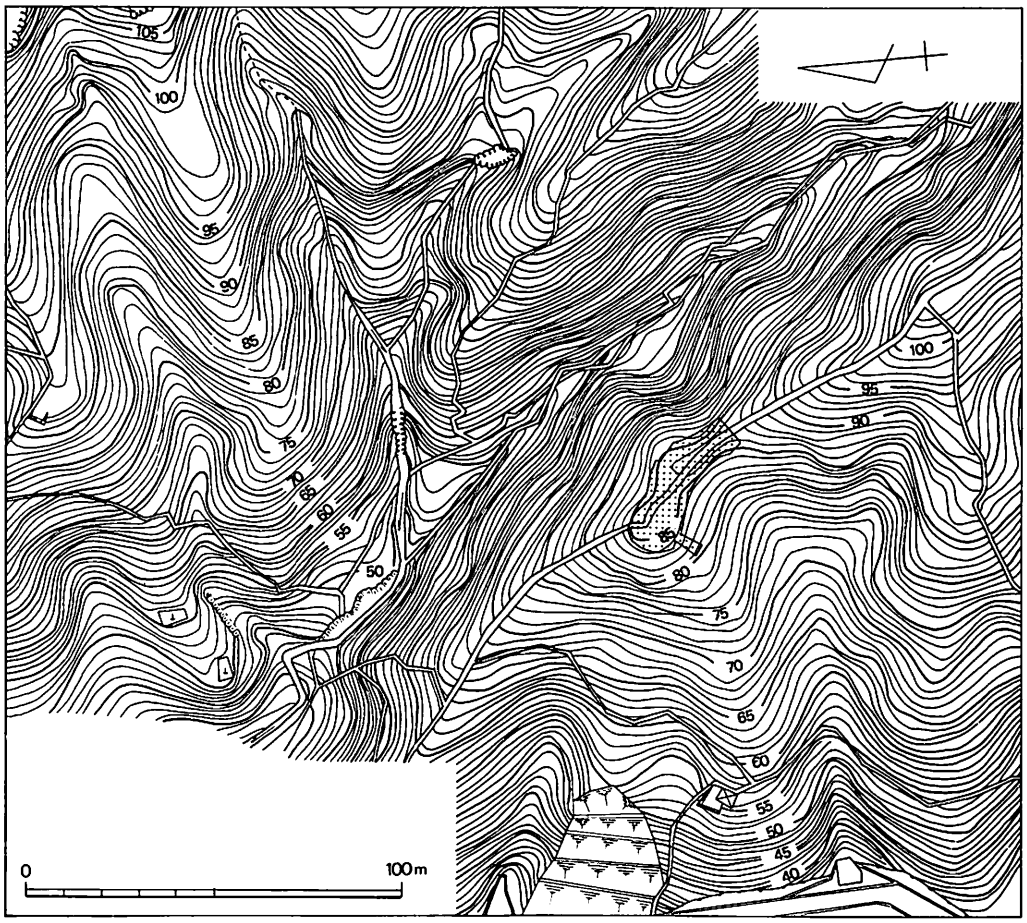
Ⅲ　須賀谷古墳群

1．調査の概要

須賀谷古墳群は，広島市東区温品字須賀谷519，520，532―2，533―1に所在する２基の古墳で構成される古墳群である。

本古墳群は南流する府中大川東岸に位置し，呉娑々宇山塊（標高682m）から西北方に派生する小尾根上に立地する。標高86mのこの小尾根先端に第１号古墳があり，尾根基部側には第２号古墳が相接して存在する。眼下の府中大川沿岸にひろがる狭隘な谷平野部からの比高は80～90mである。

両古墳とも，墳丘背後を直線的な周溝によって画する形態のもので，墳裾は明瞭でなく，その墳丘規模・墳形ともに詳らかにしえない。第１号古墳は墳頂北端に主体部（箱式石棺）１基がある。その他の遺構としては，墳頂部南半に長方形土坑（ＳＫ１），墳丘西斜面に住居跡状遺構（ＳＸ３），また，墳丘背後の周溝底面には長方形土坑（ＳＫ２）が各々存在する。遺物は，周溝上層から土師器片少量，ＳＫ２から鉄鎌・鉄鏃・金環・ガラス小玉が出土している。次に，第２号古墳は２基の主体部（いずれも二重土坑）をもち，墳丘背後に直線的な



第２図　須賀谷古墳群周辺地形図（1：2,000）アミ目は調査区を示す

周溝が存在する。主体部はいずれも墳頂部から西斜面にかかって造られており，その長軸はいずれも尾根主軸に直交している。遺物は，第１主体部から勾玉・管玉・ガラス小玉，第２主体部から鉄刀子・管玉片が各々出土している。なお，第２号古墳周溝外の尾根頂部で土坑（ＳＫ４）を検出した。遺物は，土師器細片のみである。

調査方法は，先ず両古墳の墳頂部中央に任意に基準杭を設定し，この２本の基準杭を中心に東西南北に十字の土層観察用の畦（幅50cm）を残して，表土の全面的除去を行った。厚さ約５cmの表土を除去すると，黄白色の地山（花崗岩バイラン土）が露呈し，各遺構はこの地山面で検出した。各遺構の埋土は明黄褐色～黄褐色砂質土である。

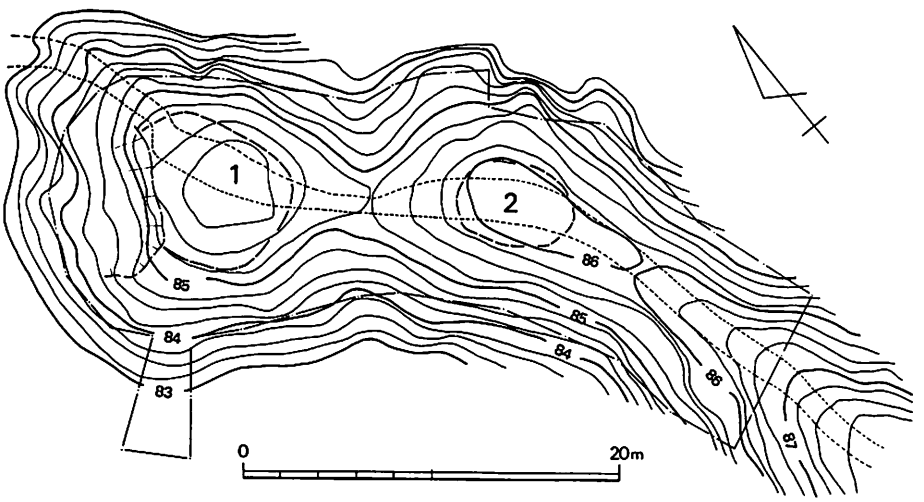
２．第１号古墳

調査前の状況（第３図，図版１ｂ）

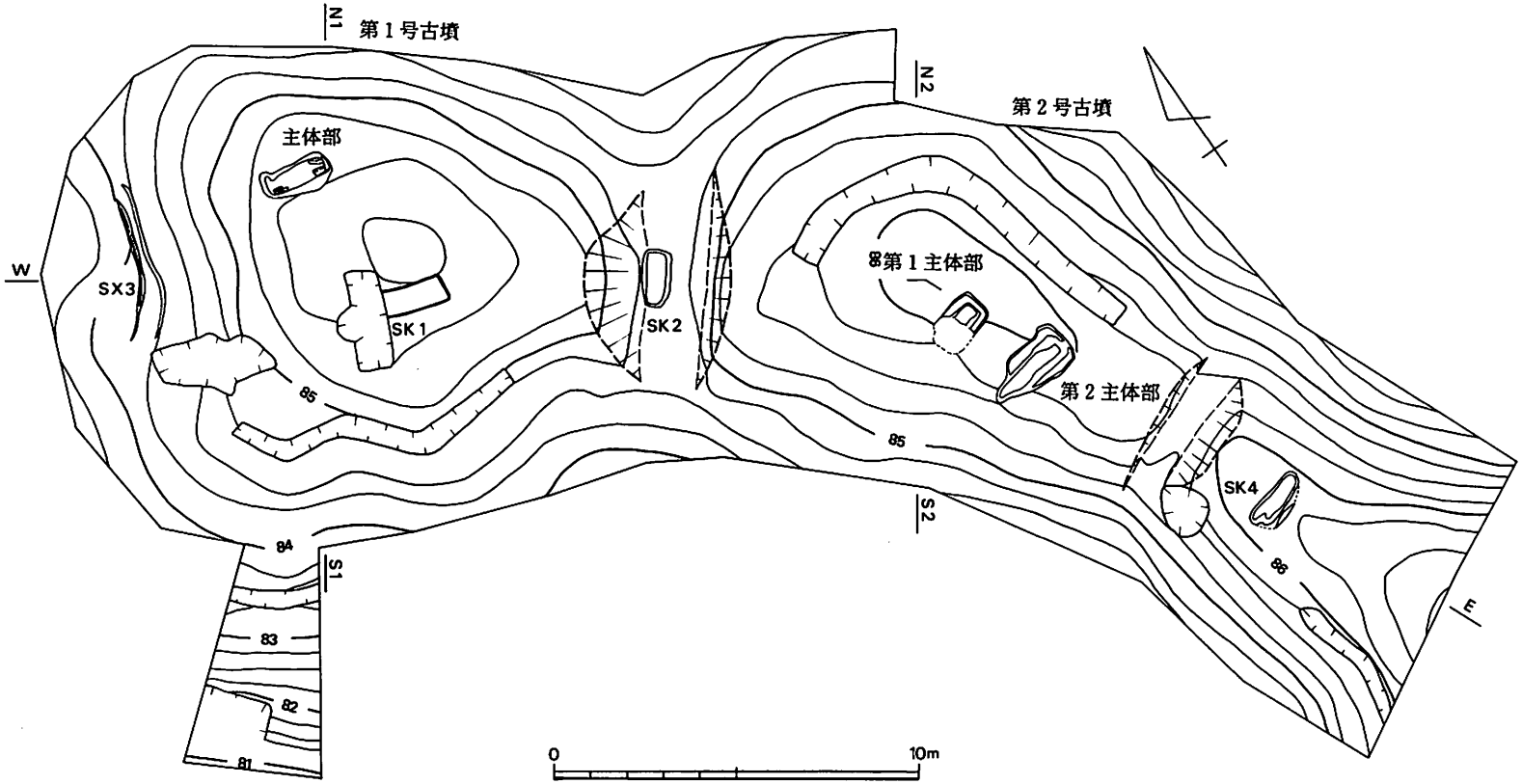
第１号古墳は尾根の先端部に位置する。尾根が下りはじめる西側から見ると，墳丘の北・西・南斜面が明確な墳端部をもたず，そのまま急峻な自然斜面に続くために，実際以上に墳丘が高く規模の大きい円墳で，その規模については，ほぼ直径11m程度と思われた。なお，墳頂には南北９ｍ，東西７ｍの広い平坦面があり，最高所の標高は86m弱である。

墳丘（第４・５図，図版２ａ）

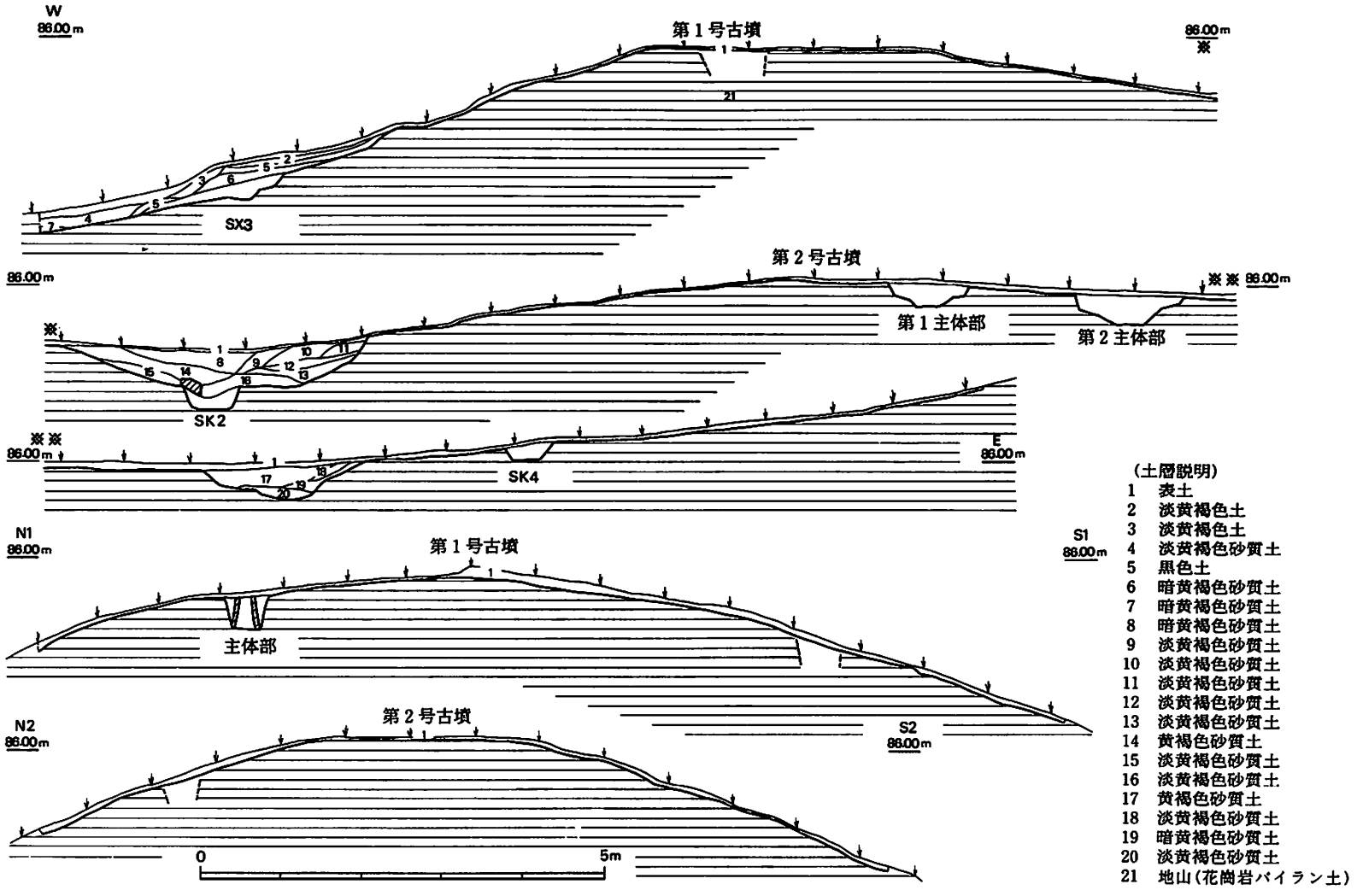
墳丘の北・西・南斜面はいずれも墳端を明らかにできなかったが，ただ，墳丘背後に認められた周溝の底面と同一標高（84.7m）をほぼ墳裾と考えると，西北一東南13m，東北一西南11mの平面不整円形の円墳である。盛土は現状では全く認められない。墳頂にはかなり広い平坦面がひろがり，断面台形状を呈する。墳丘背後の尾根鞍部を掘り込んで直線的な周溝を造っている以外には何ら墳丘への造作は認められない。なお，墳丘南斜面には植林に伴う溝状の攪乱坑が２本，また，墳頂部及び西斜面には高圧線の鉄塔埋設に伴う方形の攪乱坑が各々認められた。



第３図　須賀谷古墳群地形測量図（１：400）



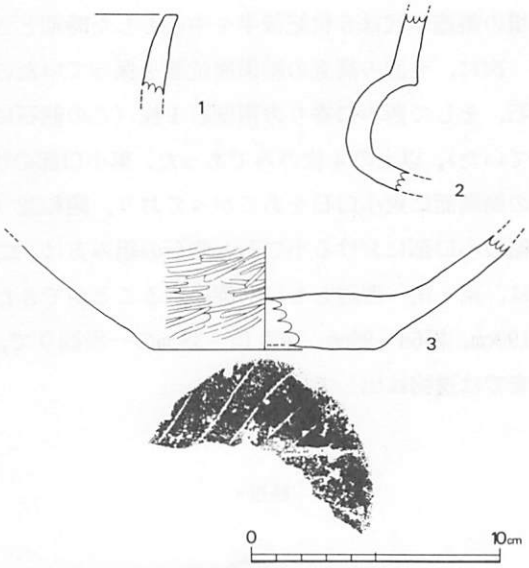
第4図　須賀谷古墳群墳丘遺存図(1：200)



第5図　須賀谷古墳群墳丘断面図(1：80)

周溝（第４・５図，図版２ａ・２ｂ）

周溝は，尾根鞍部を掘りこんで造られた直線的な溝である。規模は，長さ5.3～6.1m，上端幅1.5～4.0m，下端幅1.5～1.9m，深さは最も深い個所で0.64mである。横断面は逆台形で，溝底面は平坦である。その南・北端部で屈曲して自然斜面に連なる。周溝内には，淡黄褐色砂質土と黄褐色砂質土が堆積している。



第６図　須賀谷第１号古墳周溝内出土土器実測図（１：３）

周溝内からは，上層を中心に土師器片20～30片が出土した（第６図１～３）。大半は体部片である。図示した１～３はいずれも複合口縁の壺の部分である（同一個体の可能性が高い）。１は口縁部で，若干外反気味ながらほぼ直線的に外上方に立ちあがる。内・外面とも横ナデ調整を施している。２は口縁～頸部片で，頸部から強く「く」字状に屈曲し，やや外上方に垂直的に立ちあがる口縁部をもつ。内・外面とも横ナデ調整を施す。３は底部片で，外底面に木葉痕が観察される。内面は不定方向のナデ調整，外面は横位ヘラミガキを密に施している。１～３とも，内・外面が僅かに赤味がかかった淡黄褐色を呈する。

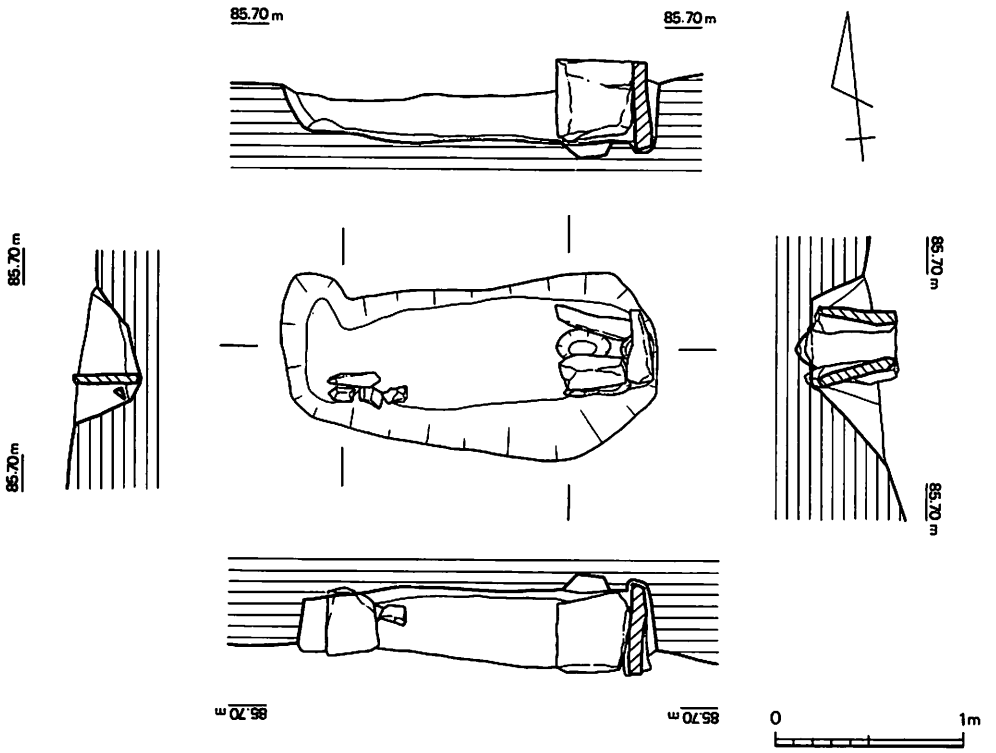
内部主体（第７図，図版３ａ）

内部主体は，墳頂の北端に位置する箱式石棺で，長軸方位はN85°Wを示し，ほぼ尾根主軸に平行している。なお，内部主体は，すでに明治45（1912）年及び昭和32（1957）年の二度にわたり発掘調査・実測が行なわれている。[註] 今回の調査は，この内部主体の確認と，過去の調査で未確認の東・南・西側の墓坑プランの確認及び原位置にある小口石・側石・墓坑の実測を主たる目的として行った。

箱式石棺の原状について，昭和32（1957）年当時すでに全ての蓋石と大半の側石はその原位置を失い，かろうじて原位置を保っていたのは，東西の小口石２枚と側石５枚であり，側石５枚のうち４枚は両小口石に接する。この調査によって，本石棺の規模は内法で長さ160cm，幅12～25cm，深さは約25cmであることが確認されている。なお，墓坑については北側壁のみ確認されていたが，東西の小口壁及び南側壁については検出されていない。遺物は，昭和32（1957）年の調査時にも若干量出土しているが，大半は明治45（1912）年の調査時のものである。仿製鏡２（八乳鏡（径10.2cm），六獣鏡（径7.1cm）），銅釧片１，鉄刀片７，鉄剣（全長40.5cm）１，鉄片１，勾玉２（碧玉製１，硬玉製１），管玉15（碧玉製），算盤玉２（紅メノウ製），小玉96（ガラス製，いずれもルリ色）が出土している。これらの出土遺物からみて，本古

墳の築造年代は5世紀後半を中心とした時期とされる。

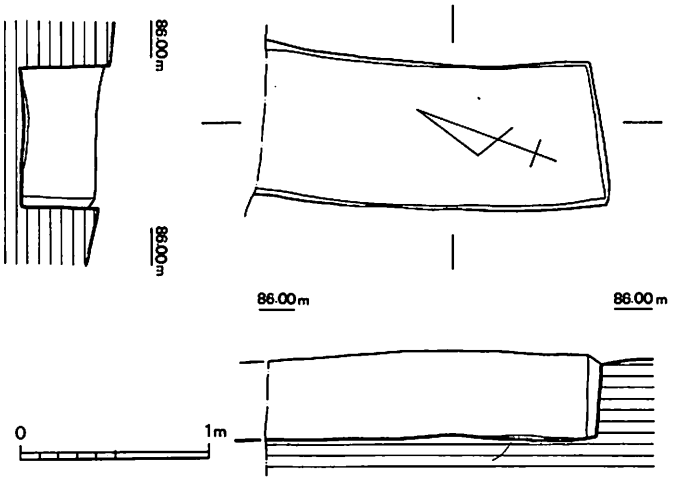
次に，今回の調査の結果原位置を保っていたのは，東小口石，東端の南側石，東端の北側石，そして西小口寄りの南側石1枚（この側石には3個の5cm大の角礫を裏込めとして用いていた)，以上の4枚のみであった。東小口部の状態は，八の字状に小口が穿まる南北両側石の側端面に東小口石をあてがっており，昭和32（1957）年の調査の成果のごとく，本箱式石棺の小口部における小口石と側石の組み方は，⊏⊐のごとくであった。次に，墓坑については，東・南・西辺ともに明確にすることができた。北辺についての現状における規模は長さ199cm，幅68～98cm，深さ15～38cmの一段掘りで，平面隅丸長方形を呈する。なお，今回の調査では遺物は出していない。



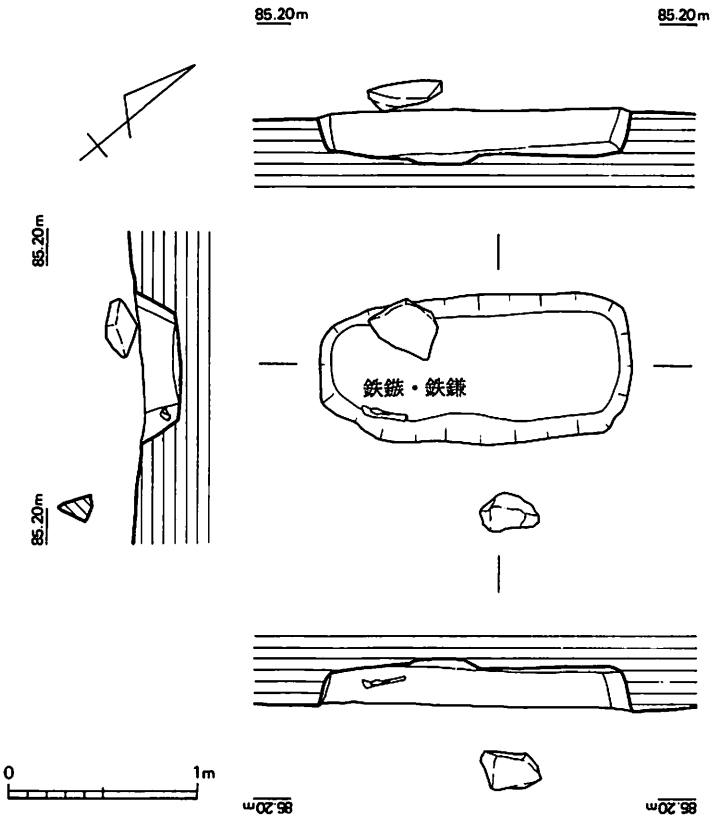
第7図　須賀谷第1号古墳主体部実測図(1：40)

その他の遺構

a．SK1（第8図，図版5a）　墳頂部中央やや南寄りで検出した長方形の土坑で，内部主体の南方約3.3mの距離にある。長軸方位はN11°Wで，ほぼ尾根主軸に沿っている。西小口壁を攪乱坑で壊されており，現存規模は長さ180cm，幅76～80cm，深さ37～45cmである。



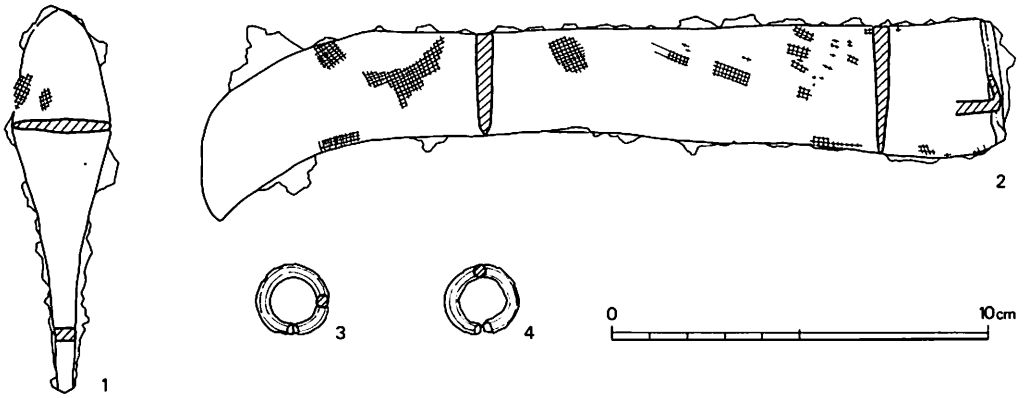
第８図　須賀谷古墳群ＳＫ１実測図（１：40）



第９図　須賀谷古墳群ＳＫ２実測図（１：40）

b．ＳＫ２（第９図，図版３ｂ）　墳丘背後の周溝底面から掘りこまれた土坑墓で，平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方位はN40°Eで，ほぼ尾根主軸に直交する。規模は，長さ165cm，幅47～80cm，深さ18～21cmである。なお，土坑の内外から30～40cm大の角礫２個が出土している。１つは，南小口寄りの西側壁から土坑内部に落ちこんだ状態で検出した。他の１つは，東側壁中央から約30cm離れ，周溝底面から約25cm浮いた状態にあった。これらの角礫はいずれもＳＫ２の棺構造に密接な関連性をもつものと考えられる。

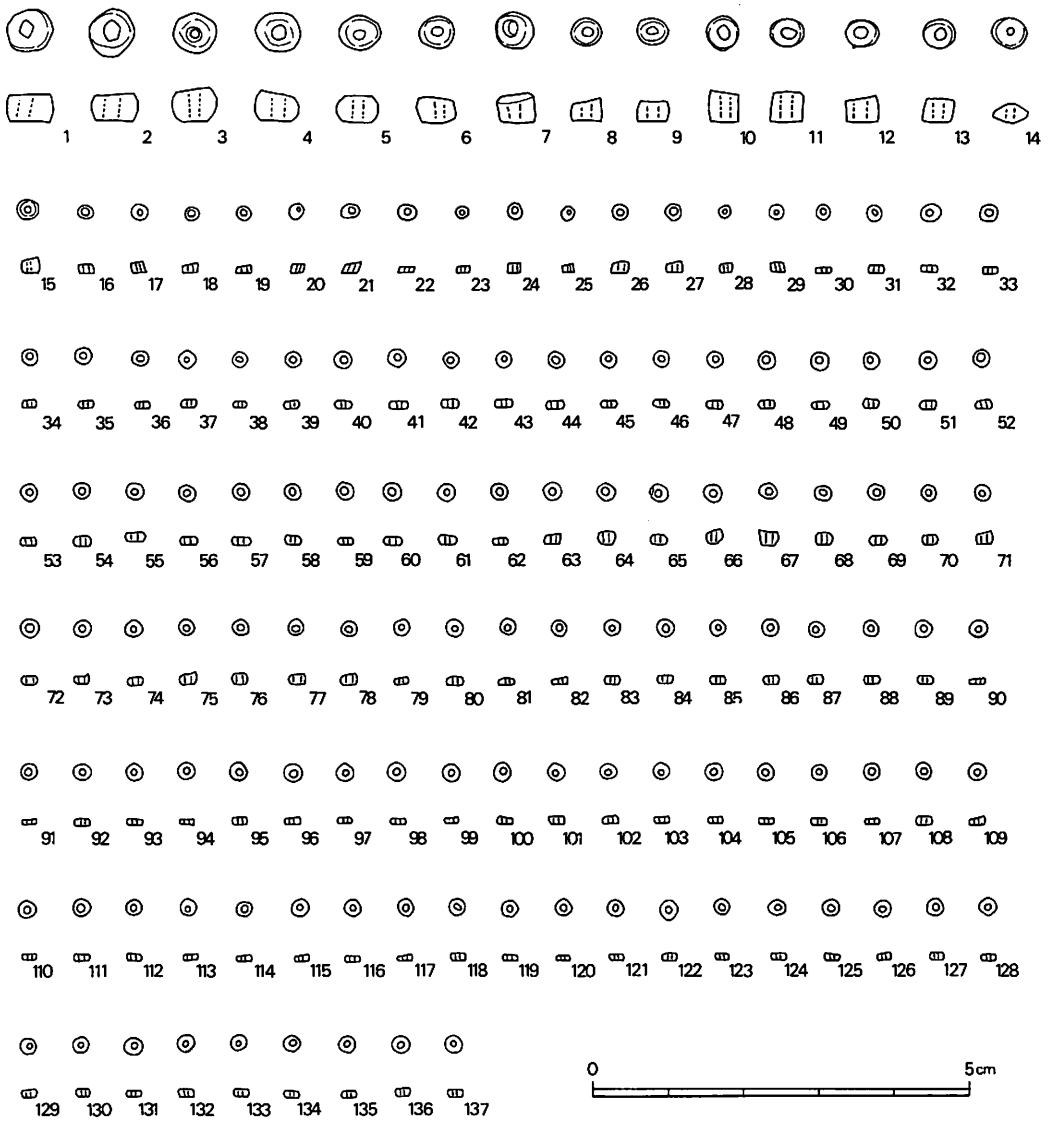
ＳＫ２から出土した遺物としては，鉄鏃１・鉄鎌１・金環２・ガラス小玉約140がある。このうち，鉄鏃と鉄鎌は南小口寄りの東側壁際で重なり合って出土した。いずれもその先端(切先）を南小口側に向けていた。鉄鏃（第10図１）は，柳葉形を呈する。先端から3.2cmの辺りに最も幅広の部分があり，そこから若干内湾気味に少しずつ幅狭になりながら茎に続く。長さ10.2cm，身幅(最大幅)2.5cm，茎幅(先端)0.4cm，身厚0.4cm，茎厚0.3cmである。鏃身に部分的に布が付着するが，これは鉄鎌に付着する布の残片である。鉄鎌（第10図２）は，先端が刃部側に湾曲する曲刃のもので，長さ21.3cm，身幅は先端で2.6cm，中央で2.8cm，基部で3.6cmである。背部の厚さは4.5～6.0mmである。折り返しは刃部に対して若干鈍角に折り曲げている。また，身全体に布目痕が顕著で，布に包んで埋納されていたものと考えられる。金環（第10図３・４）は，いずれも銅芯（３は断面正円形，４は断面方形）金張りである。金箔の残存状況はいずれもかなり良く，発色の度合いも良好である。３はほぼ円形を呈し，外法径1.85～1.95cm，断面径0.35cmである。銅芯の両端は隙間なくあわせている。４は若干矩形を呈する円形で，外法径1.85～1.95cm，断面径0.35cmである。銅芯の両端は，若干の隙間をもつ。３・４ともに銹の色調は淡緑色である。小玉（第11図）はいずれもガラス製である。総数137点を数え，その径・形態の差違により大きくＩ～IV類に分類し，各類型をさらに１～４に細分できる。大きさは，径８mm前後のもの(大形品)，径４～６mm程度のもの(中形品)，径２～４mm程度のもの(小形品)，径２mm前後のもの（極小形品）に分けられる。次に，形態的には主にその縦断面形を指標として分類する。すなわち，胴部の張り具合，上下両端面の縁辺の状況（丸味をもつ，鋭い）などであり，次のように形態１～６に分類できる。



第10図　須賀谷古墳群ＳＫ２出土鉄器・金環実測図(１：２)

第１表　須賀谷古墳群出土小玉類型一覧表

類型	I	II 1	II 2	II 3	II 4	III 1	III 2	III 3	III 4	III 5	IV 1	IV 2	IV 3
径	大形	中形	中形	中形	中形	小形	小形	小形	小形	小形	極小	極小	極小
形態	4	1	3	4	6	1	2	3	4	5	1	2	5



第11図　須賀谷古墳群ＳＫ２出土玉類実測図（１：１）

第２表　須賀谷古墳群ＳＫ２出土小玉分類表

類型	Ⅰ	Ⅱ１	Ⅱ２	Ⅱ３	Ⅱ４	Ⅲ１	Ⅲ２	Ⅲ３	Ⅲ４	Ⅲ５	Ⅳ１	Ⅳ２	Ⅳ３
色調		濃紺	濃紺 淡紺	紺 淡紺	紺		淡紺				濃紺	濃紺 紺	淡青緑 濃　紺 淡　緑
点数	0	4	4	5	1	0	1	0	0	0	9	5	108

形態１……管を輪切りにしたような形状のもので，胴部が張らず直線的なもの。端面の縁辺は鋭い。

形態２……形態１に類似するが，端面の縁辺が若干丸味をおびるもの。

形態３……胴部が張り，上下両端に広い平坦面をもつもの。

形態４……胴部が顕著に丸味をおびるもの。

形態５……径に対して厚さの数値がかなり低く，きわめてうすいもので，胴部は丸味をおびるもの。

形態６……算盤玉状のもの。

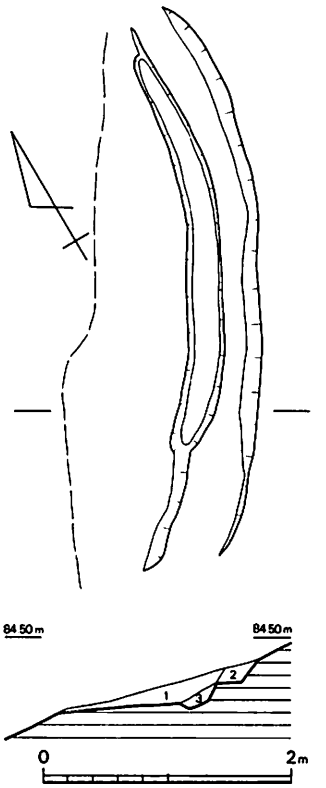
以上，径による分類と形態による分類とを併せて分類したものがⅠ～Ⅳ類である(第１表)。

ＳＫ２出土の小玉について，類型別では径２㎜前後のⅣ３類がその大半を占める(108例，78.8%)。径は最大６㎜，最小1.5㎜で大半は２㎜前後である。厚さは１㎜前後のものを中心に，最大4.6㎜，最小約0.7㎜である。孔径は0.6㎜前後のものを中心に，最大2.5㎜，最小約0.4㎜である。色調は淡青緑色のものが大半を占め，そのほかに紺色系統(淡紺色・濃紺色・紺色)と淡緑色のものがある(第２表)。

ｃ．ＳＸ３（第12図，図版５ｂ）　墳丘西斜面で検出した住居跡状遺構で，南北4.5m，東西1.65mの規模で，円形プランをもつと考えられ，壁高５～17cm，壁溝の幅14～28cm，深さ２～14cmである。遺物は全く出土していない。

(註)

本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」『芸備地方史研究』第34号　昭和35(1960)年。



(土層説明)
１．淡黄褐色砂質土
２．黄褐色砂質土
３．黄褐色砂質土

第12図　須賀谷古墳群
ＳＸ３実測図(１：60)

第3表　須賀谷古墳群ＳＫ２出土小玉計測表

No	類型	色調	法量（mm, g）				No	類型	色調	法量（mm, g）			
			径	厚さ	孔径	重量				径	厚さ	孔径	重量
1	II 2	淡紺色	6.0	3.7	2.0	0.22	70	IV 3	淡青緑色	2.0	1.3	0.6	0.005
2	II 2	淡紺色	6.0	3.8	2.5	0.20	71	IV 3	淡青緑色	2.0	1.5	0.8	0.005
3	II 3	紺色	5.7	4.6	1.2	0.19	72	IV 3	淡青緑色	2.2	1.0	0.8	0.005
4	II 3	紺色	6.0	4.0	1.9	0.10	73	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005
5	II 3	淡紺色	5.1	3.4	1.5	0.10	74	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005
6	II 3	淡紺色	4.6	3.3	1.3	0.09	75	IV 3	淡青緑色	2.0	1.4	0.7	0.005
7	II 3	紺色	5.0	4.0	2.0	0.16	76	IV 3	淡青緑色	2.0	1.3	0.7	0.005
8	II 2	濃紺色	4.0	3.0	1.2	0.09	77	IV 3	淡青緑色	2.0	1.3	1.0	0.005
9	II 2	濃紺色	4.0	2.7	1.5	0.08	78	IV 3	淡青緑色	2.0	1.3	0.7	0.005
10	II 1	濃紺色	4.3	4.1	1.2	0.15	79	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.5	0.005
11	II 1	濃紺色	4.0	4.0	1.5	0.07	80	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005
12	II 1	濃紺色	4.2	3.4	1.9	0.09	81	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.5	0.005
13	II 1	濃紺色	4.0	3.0	1.0	0.09	82	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.8	0.005
14	II 4	紺色	4.4	2.8	1.0	0.10	83	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005
15	III 2	淡紺色	2.8	2.0	0.8	0.02	84	IV 3	淡青緑色	2.1	1.0	0.7	0.005
16	IV 1	濃紺色	1.9	1.0	1.0	0.005	85	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
17	IV 1	濃紺色	1.5	1.3	1.0	0.005	86	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
18	IV 1	濃紺色	1.9	1.1	1.2	0.005	87	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
19	IV 1	濃紺色	2.0	1.0	0.6	0.005	88	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005
20	IV 1	濃紺色	1.5	1.1	0.4	0.005	89	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
21	IV 1	濃紺色	1.8	1.4	0.8	0.005	90	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.5	0.005
22	IV 1	濃紺色	1.8	0.9	0.9	0.005	91	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	1.0	0.005
23	IV 1	濃紺色	1.8	0.8	0.7	0.005	92	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.7	0.005
24	IV 2	濃紺色	1.9	1.2	0.8	0.005	93	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	1.0	0.005
25	IV 1	濃紺色	1.5	1.0	0.5	0.005	94	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	1.0	0.005
26	IV 2	濃紺色	2.0	1.4	0.9	0.005	95	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
27	IV 2	濃紺色	2.0	1.4	1.0	0.005	96	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
28	IV 2	濃紺色	1.8	1.1	0.6	0.005	97	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
29	IV 2	紺色	1.8	1.3	0.8	0.005	98	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.6	0.005
30	IV 3	濃紺色	2.0	0.7	1.0	0.005	99	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.5	0.005
31	IV 3	淡緑色	1.8	1.0	0.8	0.005	100	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
32	IV 3	淡紺色	2.5	1.0	0.9	0.005	101	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
33	IV 3	淡紺色	2.0	0.9	1.0	0.005	102	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
34	IV 3	淡紺色	2.0	1.0	0.8	0.005	103	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.9	0.005
35	IV 3	淡紺色	2.0	1.0	1.0	0.005	104	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005
36	IV 3	淡紺色	2.1	1.0	0.9	0.005	105	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
37	IV 3	淡青緑色	2.1	1.2	0.5	0.005	106	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
38	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005	107	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.6	0.005
39	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005	108	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.7	0.005
40	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005	109	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
41	IV 3	淡青緑色	2.2	1.0	0.9	0.005	110	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
42	IV 3	淡青緑色	2.0	1.2	0.8	0.005	111	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.9	0.005
43	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005	112	IV 3	淡青緑色	2.0	0.7	0.9	0.005
44	IV 3	淡青緑色	2.2	1.0	0.5	0.005	113	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
45	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005	114	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.5	0.005
46	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.6	0.005	115	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.7	0.005
47	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005	116	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.7	0.005
48	IV 3	淡青緑色	2.1	1.0	0.7	0.005	117	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.5	0.005
49	IV 3	淡青緑色	2.2	1.0	1.0	0.005	118	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
50	IV 3	淡青緑色	2.1	1.2	0.7	0.005	119	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.5	0.005
51	IV 3	淡青緑色	2.1	1.0	0.6	0.005	120	IV 3	淡青緑色	2.0	0.7	0.5	0.005
52	IV 3	淡青緑色	2.1	1.0	0.6	0.005	121	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.7	0.005
53	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005	122	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	1.0	0.005
54	IV 3	淡青緑色	2.0	1.2	1.0	0.005	123	IV 3	淡青緑色	2.0	0.8	0.8	0.005
55	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005	124	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.9	0.005
56	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005	125	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.9	0.005
57	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005	126	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.9	0.005
58	IV 3	淡青緑色	2.1	1.3	0.8	0.005	127	IV 3	淡青緑色	2.1	1.0	0.9	0.005
59	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	1.0	0.005	128	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.8	0.005
60	IV 3	淡青緑色	2.1	1.0	0.7	0.005	129	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.8	0.005
61	IV 3	淡青緑色	2.1	1.2	0.8	0.005	130	IV 3	淡青緑色	2.2	1.0	0.8	0.005
62	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005	131	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.7	0.005
63	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005	132	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
64	IV 3	淡青緑色	2.1	1.5	0.7	0.005	133	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.5	0.005
65	IV 3	淡青緑色	2.2	1.1	1.0	0.005	134	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.6	0.005
66	IV 3	淡青緑色	2.0	1.9	1.0	0.005	135	IV 3	淡青緑色	2.0	0.9	0.9	0.005
67	IV 3	淡青緑色	2.0	1.8	0.8	0.005	136	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.7	0.005
68	IV 3	淡青緑色	2.0	1.5	0.8	0.005	137	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.6	0.005
69	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	0.8	0.005							

3．第2号古墳

調査前の状況（第3図，図版1ｂ）

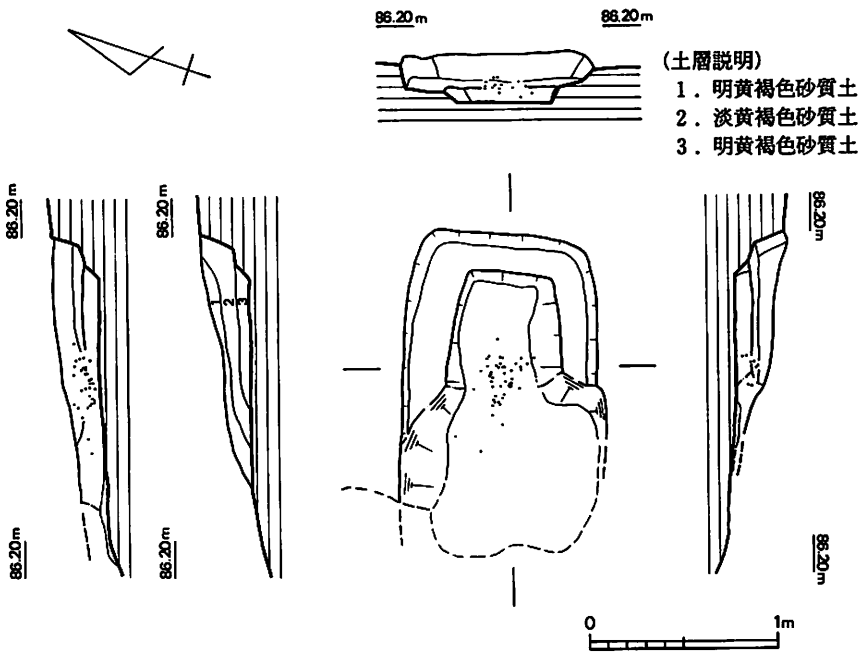
第2号古墳は，鞍部を介して第1号古墳の背後すなわち尾根の基部側にある。調査前の印象では，北側・南側は尾根鞍部があるために比較的墳端を捉えやすかった。西・東斜面はそのまま急峻な自然斜面に続くために墳端を捉えにくかったが，幾分傾斜が急になる88.25mの等高線の付近を墳端と考え，南北約14m，東西約10mの楕円形を呈する円墳と考えられた。墳頂には，南北6ｍ，東西4ｍの楕円形を呈する平坦面があり，最高所の標高86m強である。

墳丘（第4・5図，図版6ａ）

墳丘の東・西斜面は，いずれも墳端を明らかにしえない。墳丘の南北の墳端は，2つの周溝の存在により明らかであり，南北の墳丘規模は約14mとなる。東西の墳丘規模は，これらの周溝底面と同一標高（84.75～85.25m）の付近を墳裾と考えると，ほぼ10mの規模をもつと考えられる。このことから，墳形は，不整長円形を呈しているといえる。なお，墳頂には比較的広い平坦面が認められ，東西断面は台形状を呈する。また，墳丘の東斜面には植林に伴う溝状の攪乱坑が存在する。

周溝（第4・5図，図版6ａ・6ｂ）

墳丘背後のゆるやかな尾根鞍部を掘りこんで造られた直線的な溝で，長さ4.4m，上端幅1.0～2.1m，下端幅0.9～1.0m，深さは最も深い箇所で0.39mである。横断面形は多少の凹凸はあるもののほぼ逆台形を呈し，溝底面もほぼ平坦である。両端で屈曲して急峻な自然斜



第13図　須賀谷第2号古墳第1主体部実測図（1：40）ドットは玉類を示す

面に続く。溝内には，底面に淡黄褐色砂質土が堆積し，その上に暗黄褐色砂質土・淡黄褐色砂質土・黄褐色砂質土が堆積している。周溝内からは遺物は出土していない。

内部主体

墳頂部のやや南に寄った位置で，2基の内部主体を検出した。いずれも二重土坑で，頂部から若干西斜面にさがった位置に近接して造られていた。

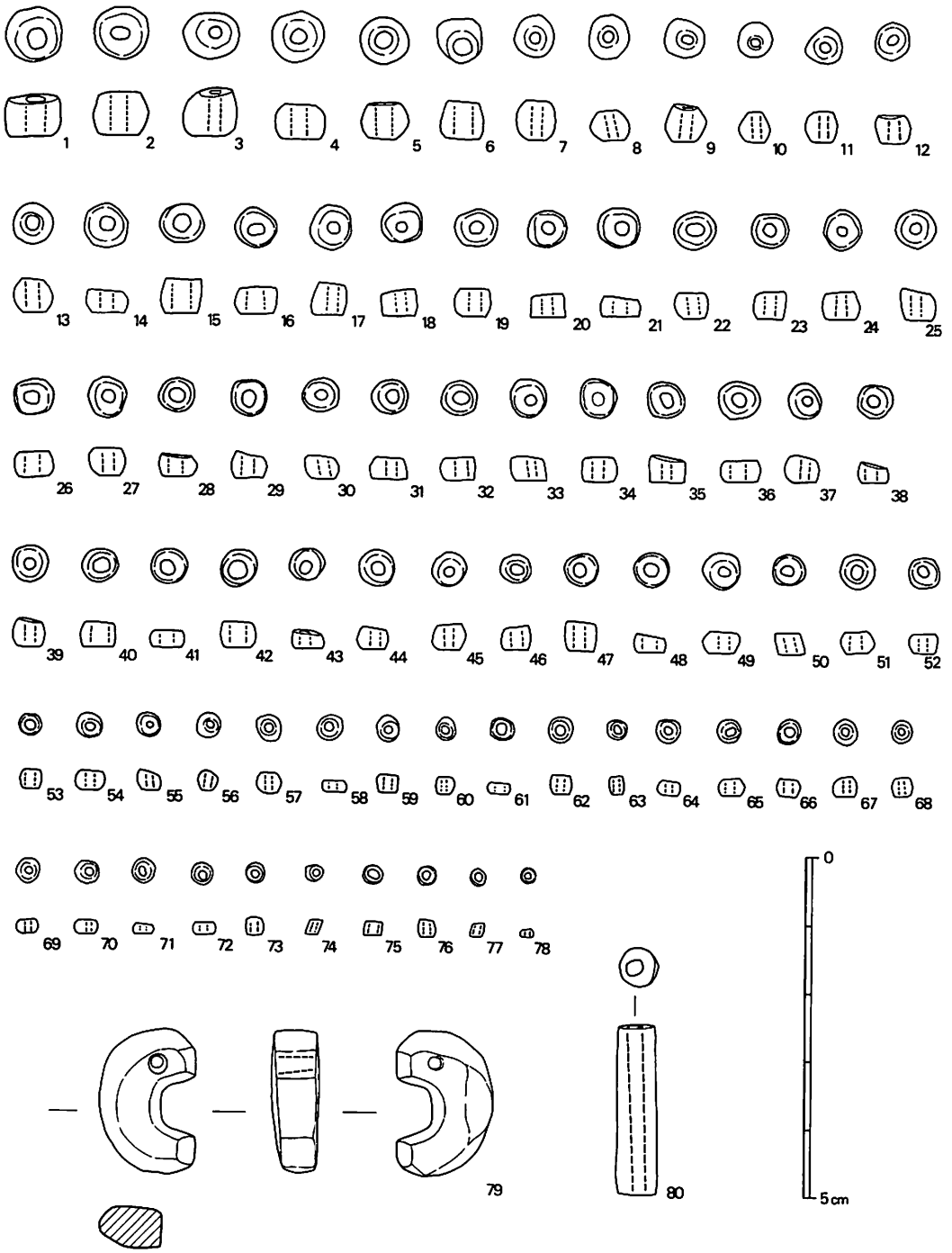
a. 第1主体部（第13図，図版7a）　墳頂中央から1mほど南に寄った位置にある。長軸方位はN72°Eで，尾根主軸に直交する。平面隅丸長方形の二重土坑で，その斜面側の西半分は木根により大きく攪乱をうけている。現存規模は，上段墓坑が長さ145cm，幅87～102cm，深さ3～15cm，下段墓坑が長さ60cm，幅45～60cm，深さ5～7cmである。この下段墓坑内中央から，勾玉1・管玉1・ガラス小玉78が出土した。

小玉（第14図1～78）は総数78点を数え，いずれもガラス製である。類型別では，中形品

第4表　須賀谷第2号古墳第1主体部出土小玉計測表

No	類型	色調	法量（mm，g）				No	類型	色調	法量（mm，g）			
			径	厚さ	孔径	重量				径	厚さ	孔径	重量
1	I	濃紺色	8.3	6.2	3.0	0.56	40	II 2	紺色	5.0	3.7	2.5	0.11
2	I	濃紺色	8.0	6.5	2.5	0.50	41	II 2	紺色	5.2	2.5	2.3	0.13
3	I	紺色	8.1	7.0	2.0	0.45	42	II 2	紺色	5.0	3.8	2.8	0.12
4	I	濃青色	7.8	5.1	2.3	0.45	43	II 2	紺色	4.5	2.7	1.8	0.05
5	II 3	紺色	7.0	5.3	2.5	0.36	44	II 2	紺色	5.3	3.2	2.0	0.13
6	II 3	黒紫色	6.3	5.7	3.7	0.35	45	II 2	紺色	5.0	4.9	1.8	0.12
7	II 3	橙色	6.3	6.0	1.6	0.30	46	II 2	紺色	4.5	4.6	1.8	0.11
8	II 3	橙色	6.6	4.6	1.6	0.30	47	II 2	紺色	4.9	4.3	1.7	0.15
9	II 3	紺色	5.3	5.5	1.7	0.23	48	II 2	紺色	5.0	2.7	2.5	0.10
10	II 3	橙色	4.5	4.5	1.3	0.17	49	II 2	紺色	5.3	3.1	1.8	0.12
11	II 3	橙色	5.5	4.5	1.4	0.20	50	II 2	紺色	4.0	3.0	2.0	0.09
12	II 3	濃紺色	5.5	4.0	1.5	0.18	51	II 2	紺色	4.8	3.1	1.9	0.13
13	II 3	橙色	5.7	5.0	2.0	0.35	52	II 2	紺色	4.6	2.9	1.7	0.09
14	II 2	濃紺色	6.6	3.4	2.0	0.20	53	III 4	紺色	3.2	3.0	1.7	0.05
15	II 2	暗青色	5.6	5.0	2.5	0.20	54	II 2	紺色	3.7	3.0	1.5	0.10
16	II 2	濃紺色	6.0	4.0	2.5	0.16	55	III 4	紺色	3.5	3.0	1.0	0.10
17	II 2	暗青色	6.5	2.8	1.6	0.29	56	III 4	紺色	3.5	3.0	1.2	0.13
18	II 2	紺色	6.0	4.0	1.6	0.21	57	III 4	紺色	3.8	3.0	1.2	0.10
19	II 2	濃紺色	5.9	4.0	1.8	0.16	58	III 3	紺色	3.5	1.7	1.4	0.05
20	II 2	紺色	5.2	3.5	2.1	0.11	59	III 3	紺色	3.0	2.8	1.0	0.12
21	II 2	紺色	6.0	3.0	2.0	0.19	60	III 3	紺色	2.7	2.4	1.1	0.08
22	II 2	紺色	5.3	3.8	2.5	0.15	61	III 3	紺色	3.5	1.6	1.6	0.05
23	II 2	紺色	5.5	4.0	1.7	0.18	62	II 3	紺色	3.0	2.9	1.5	0.11
24	II 2	紺色	6.0	4.0	1.5	0.20	63	III 4	紺色	2.5	2.9	0.7	0.06
25	II 2	紺色	5.9	4.5	1.5	0.25	64	III 3	紺色	3.5	2.0	1.2	0.08
26	II 2	紺色	6.0	3.8	2.0	0.18	65	III 3	紺色	3.2	2.5	1.8	0.08
27	II 2	紺色	5.8	4.0	1.7	0.20	66	III 3	紺色	3.7	2.7	1.5	0.10
28	II 2	紺色	5.3	3.4	2.3	0.12	67	III 4	紺色	2.8	3.0	1.5	0.11
29	II 2	紺色	5.4	3.9	2.5	0.15	68	III 4	紺色	3.4	2.8	0.7	0.05
30	II 2	紺色	5.2	3.5	2.0	0.11	69	II 2	紺色	3.5	2.0	1.0	0.02
31	II 2	紺色	5.1	3.3	2.0	0.11	70	III 5	淡青緑色	3.5	2.0	1.0	0.30
32	II 2	紺色	5.0	3.2	2.2	0.10	71	III 5	淡青緑色	3.7	1.5	1.4	0.02
33	II 2	濃紺色	5.2	3.6	1.5	0.15	72	III 2	淡青色	3.3	1.9	1.5	0.08
34	II 2	紺色	5.5	3.6	1.7	0.10	73	III 2	淡青色	2.8	2.7	1.2	0.04
35	II 2	濃紺色	5.8	4.0	4.7	0.18	74	III 1	濃青色	1.8	2.2	0.7	0.05
36	II 2	紺色	6.0	3.0	2.0	0.10	75	III 1	濃青色	2.5	2.0	1.7	0.02
37	II 2	紺色	5.0	4.0	1.7	0.12	76	III 1	濃青色	2.7	2.5	1.4	0.04
38	II 2	紺色	5.0	3.0	1.8	0.09	77	IV 2	紺色	2.5	2.0	1.3	0.01
39	II 2	紺色	5.2	4.0	1.5	0.11	78	IV 3	淡青緑色	2.0	1.0	1.0	0.005

のII 2類が中心で(41例，53%)，他にII 1・III 3・III 4類がやや目立つ存在である。径は最大8.3㎜，最小1.8㎜で2～4㎜程度の小形品と4～6㎜程度の中形品が多い。厚さは最大7



第14図　須賀谷第2号古墳第1主体部出土玉類実測図(1：1)

第5表　須賀谷第2号古墳第1主体部出土小玉分類表

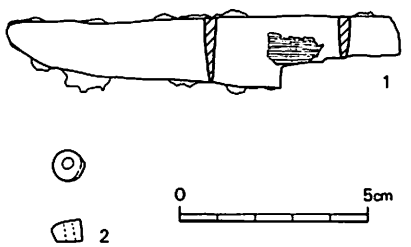
類型	I	II 1	II 2	II 3	II 4	III 1	III 2	III 3	III 4	III 5	IV 1	IV 2	IV 3
色調	濃紺 紺 濃青		紺 淡紺 暗青	橙 紺 濃紺 黒紫		濃青	淡青	紺	紺	淡青緑		紺	淡青緑
点数	4	0	41	10	0	3	2	7	7	2	0	1	1

mm，最小1mmで，2～4mmのものが主体を占める。孔径は最大4.7mm，最小0.7mmで，2～3.5mmのものが中心である。色調は，紺色・濃紺色・濃青色・暗青色・淡青緑色・黒紫色・橙色とバラエティに富むが，その主体は紺系統のものである。橙色の小玉が5例存在する点が特長である。ＳＫ2出土玉類と比較すると，ＳＫ2の主体を占めた極小形品のIV類が僅か2例しかみられない点，また，ＳＫ2では皆無であった径8mm前後の大形品が4例みられるなど類型別の組成に大きな差違がみられるものの，ガラス小玉そのものの質・色調・製作技法などはほぼ同一と考えられる(第4表・第5表)。

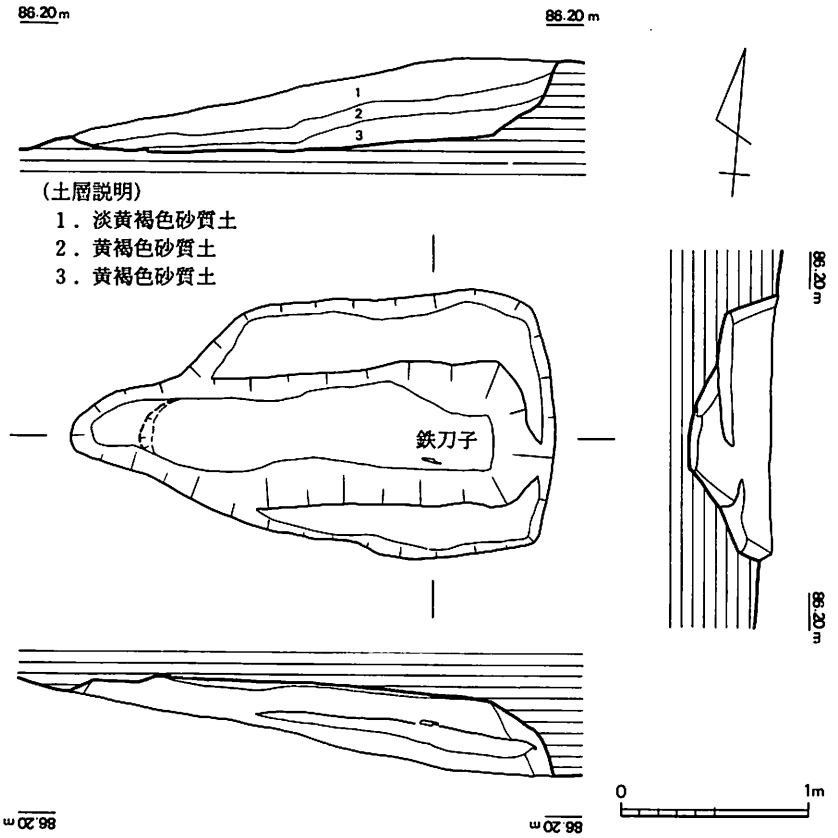
勾玉（第14図79）は，全体にうすく緑色をおびた淡黄白色を呈し，長さ21mm，幅（中央部）14mm，厚さ（中央部）9mm，孔径1.5～3.0mmである。鈍い光沢をもちヒスイ製かと考えられ，穿孔は一方向からのみ行われている。管玉（第14図80）は，淡青緑色を呈し，碧玉製と考えられる。長さ25mm，径6mm，孔径2mm。穿孔は一方向からのみ行われていると考えられる。

b．第2主体部（第16図，図版8ａ）　第1主体部の南方1mの位置にある。長軸方位はN86°Eで，尾根主軸に直交する。西小口側⅓程度が部分的に流失しており，原状では平面隈丸長方形の二重土坑と考えられる。現存規模は，上段墓坑が長さ約200cm，最大幅139cm，深さ7～30cm，下段墓坑は平面不整隅丸長方形を呈し，長さ251cm，幅69～77cm，深さ5.5～24.5cmである。下段墓坑の底面は，水平ではなくかなり西斜面側に下傾している。遺物は，下段墓坑の東小口寄りの位置で鉄刀子1が出土しているほか，管玉片が出土した。

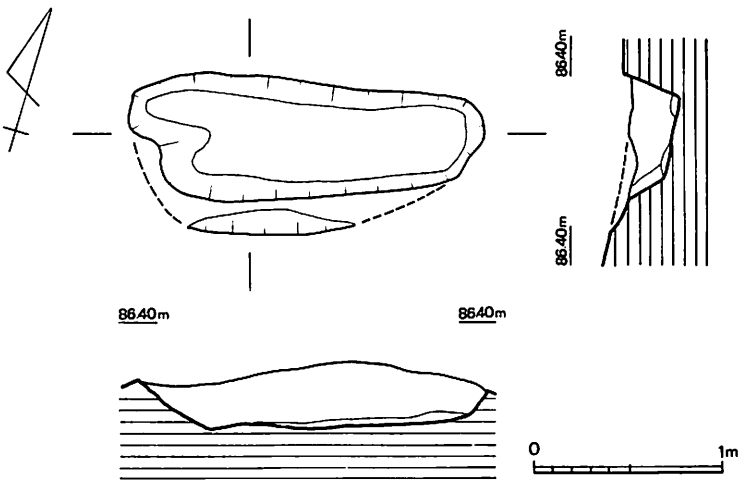
鉄刀子（第15図1）は，全長10.4cm，刃部長7.3cm，茎長3.1cm，刃部幅は切先部で0.7cm，中央部で1.6cm，関部で1.9cm，茎幅は関部で1.35cm，先端で1.0cm，背部の厚さは刃部で0.35cm，茎の部分で0.3cmである。切先は丸味をおびる。関は，片関で鋭く直角的に切れこんでいる。管玉片(第15図2)は，上下両端を研磨して小玉としたもので，径3.5～4mm，孔径1mmである。淡青緑色を呈し，碧玉製と思われる。



第15図　須賀谷第2号古墳第2主体部出土鉄器・玉類実測図(1：2，1：1)



第16図　須賀谷第２号古墳第２主体部実測図(１：40)



第17図　須賀谷古墳群ＳＫ４実測図(１：40)

4．ＳＫ４（第17図，図版９ａ）

ＳＫ４は，第２号古墳の周溝から約２ｍ南方の尾根頂部で検出した土坑である。長軸方位はＮ73.5°Ｅで，尾根主軸に直交する。平面形は，不整隅丸長方形を呈する。上段墓坑の大部分は流失しており，南側壁を僅かに残すのみである。この僅かに残る上段墓坑の深さは，13.5cmである。下段墓坑は，長さ189cm，幅41～67cm，深さ12～30cmである。底面は，ほぼ水平で平坦である。坑内からの出土遺物としては，土師器細片が数点ある。

5．まとめ

立地　須賀谷古墳群は，広島市東郊の呉娑々宇山塊から西方に派生した，標高86m，眼下に望む平野からの比高70～80mの小尾根上に立地する２基の古墳からなる。

墳丘構造　２基の古墳は，いずれも墳丘背後の尾根をカットして直線的な周溝を設けたのみで明確な墳裾をもたないが，第１号古墳は西北一東南13m×東北一西南11mの平面不整円形の円墳であり，第２号古墳は南北14m×東西10mの平面不整長円形を呈する。

内部主体とその他の埋葬施設　内部主体については，第１号古墳が箱式石棺であり，第２号古墳は土坑墓（二重土坑）である。これら内部主体とは別に，墳丘外に２基の土坑墓（ＳＫ２・ＳＫ４）が存在する。ＳＫ２は第１号古墳の周溝底面で，ＳＫ４は第２号古墳の周溝の外方の尾根頂部で検出した。

第１号古墳の内部主体（箱式石棺）は，墳頂部の北に偏った位置にある。本古墳については墳頂部中央が大きく攪乱をうけており，箱式石棺以外の中心的な内部主体の存否については明らかではない。なお，ＳＫ１については出土遺物が皆無であり，その土坑の形態等の面でも埋葬施設であるとは断言できない。次に，箱式石棺の被葬者とＳＫ２の被葬者との関係については，ＳＫ２が墳丘外の周溝底面に第１号古墳築造時あるいは築造後それほど時間を隔てないで掘りこまれていること，比較的豊富な副葬品を有していたことなど両者が何らかの強い紐帯関係（血縁関係を含む）にあったことをうかがわせる。また，第２号古墳の内部主体２基については，両者が墳頂部からやや南斜面にさがった位置に相接するように並行して造られていることから，比較的近い時期に相次いで埋葬されたものと想定される。さらに，両主体部を土坑の規模・出土遺物について比較してみると，土坑規模については第２主体部が大きく，第１主体部が小形である。出土遺物については，第１主体部は勾玉・管玉・ガラス小玉の玉類のみであるのに対して，第２主体部では鉄刀子・管玉片が出土している。これらのことから，両主体部の被葬者は近親関係にあり，しかも，第２主体部が第２号古墳の中心的な内部主体であることが考えられる。また，第２号古墳の周溝外にあるＳＫ４については，第２号古墳の２つの主体部の被葬者たちと何らかの血縁関係を含めた紐帯関係にある人物の埋葬施設と想定される。

遺物等からみた古墳群の築造年代　まず，第１号古墳については箱式石棺に伴う遺物として，仿製鏡（八乳鏡・六獣鏡），武器（鉄刀・鉄剣），装身具（銅釧・勾玉・管玉・算盤玉・ガラス

小玉)があり，５世紀後半を中心とした時期のものとされている[註]。ＳＫ２からは，農工具(鉄鎌)，武器(鉄鏃)，装身具（金環・ガラス小玉）が出土しており，曲刃鎌・柳葉形鉄鏃の存在などから５世紀中葉を中心とした時期をあてることができよう。また，第１号古墳の周溝埋土上層を中心として土師器（複合口縁壺）の破片が出土している。この複合口縁壺は，若干外反気味であるがほぼ垂直に立ちあがる口縁部，短かく強く屈曲する頸部，平底の底部（外底面には木葉痕が認められる）などの形態上の諸特徴から５世紀中葉を中心とした時期に属すると考えられる。この壺については，本来第１号古墳の墳丘上に置かれていたものが，周溝がある程度埋積した段階で周溝内に転落したものと考えられ，第１号古墳築造に伴うものである。これらのことから，第１号古墳の築造年代は５世紀中葉～後葉を中心とした時期に求めることができる。第２号古墳については時期を決定する遺物に乏しいが，第１主体部出土のガラス小玉が第１号古墳のＳＫ２のガラス小玉と形態・色調などの面で酷似していること及び第２主体部出土の鉄刀子が片関（刃関）であることなどから，その築造年代を大まかに５世紀代ととらえることができよう。ただし，古墳の立地状況から第２号古墳は，第１号古墳に後出すると考えられることから，第２号古墳の築造年代は５世紀後半を中心とした時期に求めることができる。

以上のように，須賀谷古墳群は５世紀中葉～後葉を中心とした時期に，西方に派生した細尾根上に築造された小規模な古墳群であるが，特に第１号古墳については質・量ともに比較的豊富な副葬品をもつ内部主体を有しており，広島湾岸東部の小地域（府中大川流域）における一首長あるいはこれに準ずる有力者を被葬者として考えることができよう。

（註）

本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」『芸備地方史研究』第34号　昭和35(1960)年。

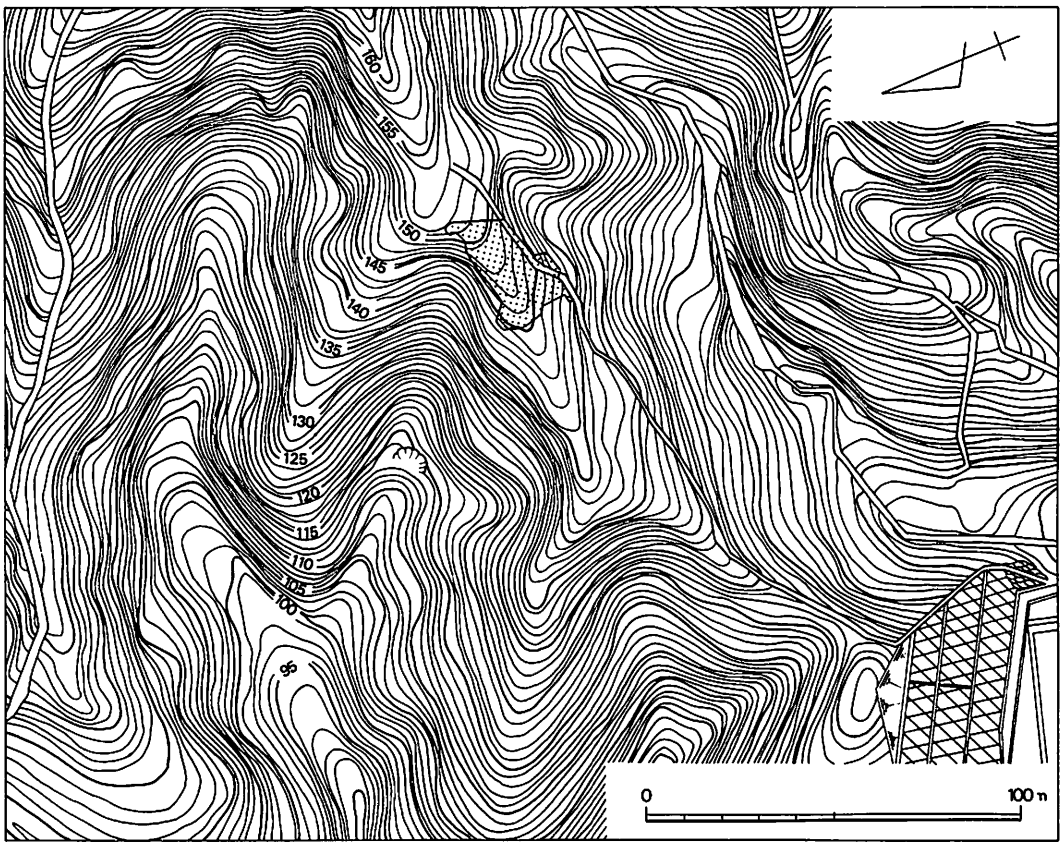
Ⅳ 畳谷東遺跡

1．調査の概要

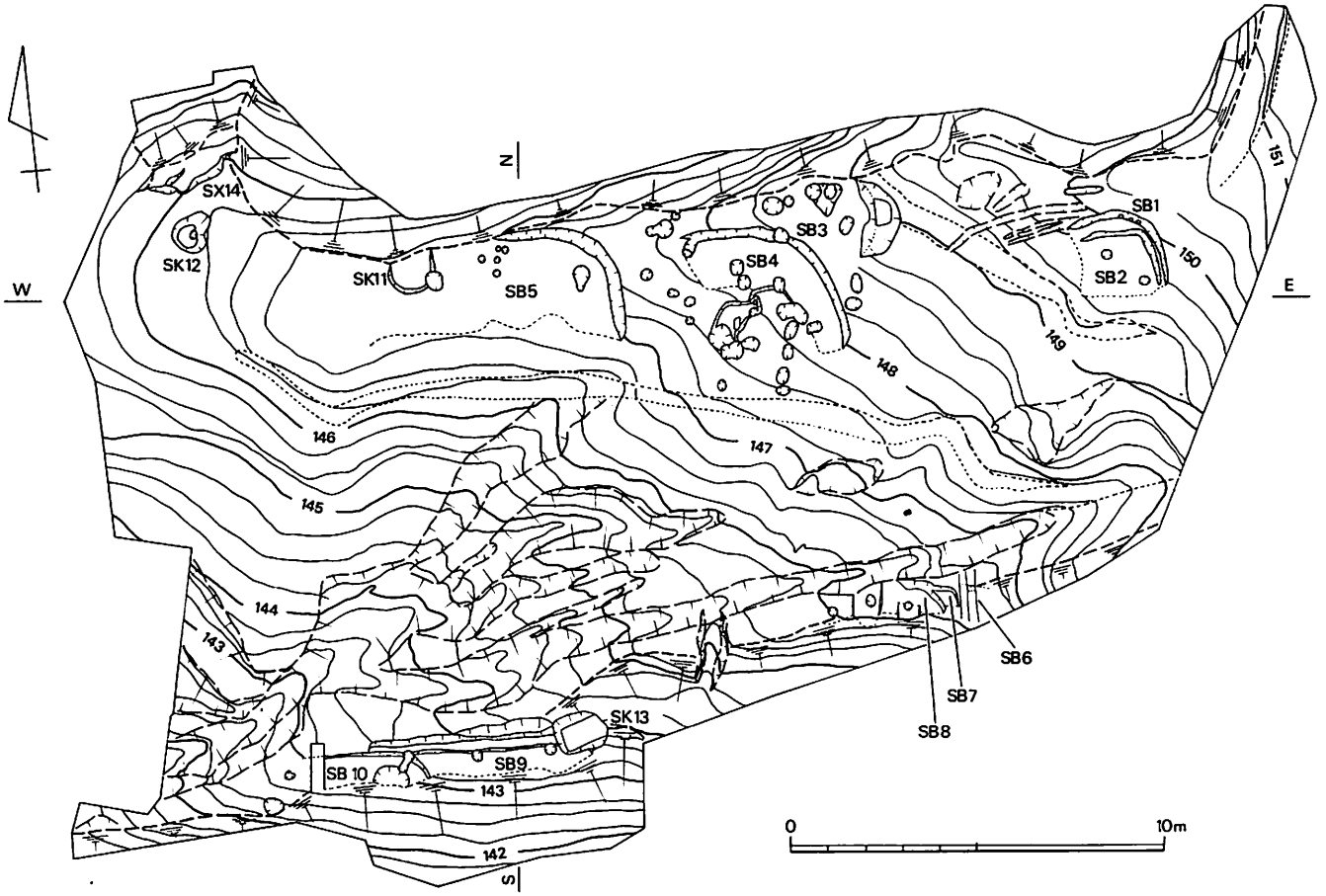
畳谷(たたみだに)東遺跡は，広島市東区温品字畳谷371,402,403に所在する弥生時代後期の集落跡である。

本遺跡は，南流する府中大川の東岸，標高682mの呉娑々宇山山頂から西方にのびる小尾根上に立地する。尾根頂部の北側は真近まで崖状の急斜面が入りこんでおり，遺構は，東から西にのびる標高145～151mの尾根頂部と，この尾根頂部から10～30度の角度で下る南斜面下方（標高143～147m）の２箇所に存在する。遺構は，いずれにしても南斜面に深く刻みこまれた自然流水の流路の存在が示すように，花崗岩バイラン土という地山の浸蝕のうけやすさが大きく原因して，自然流失・攪乱が著しく原状をそこねている。

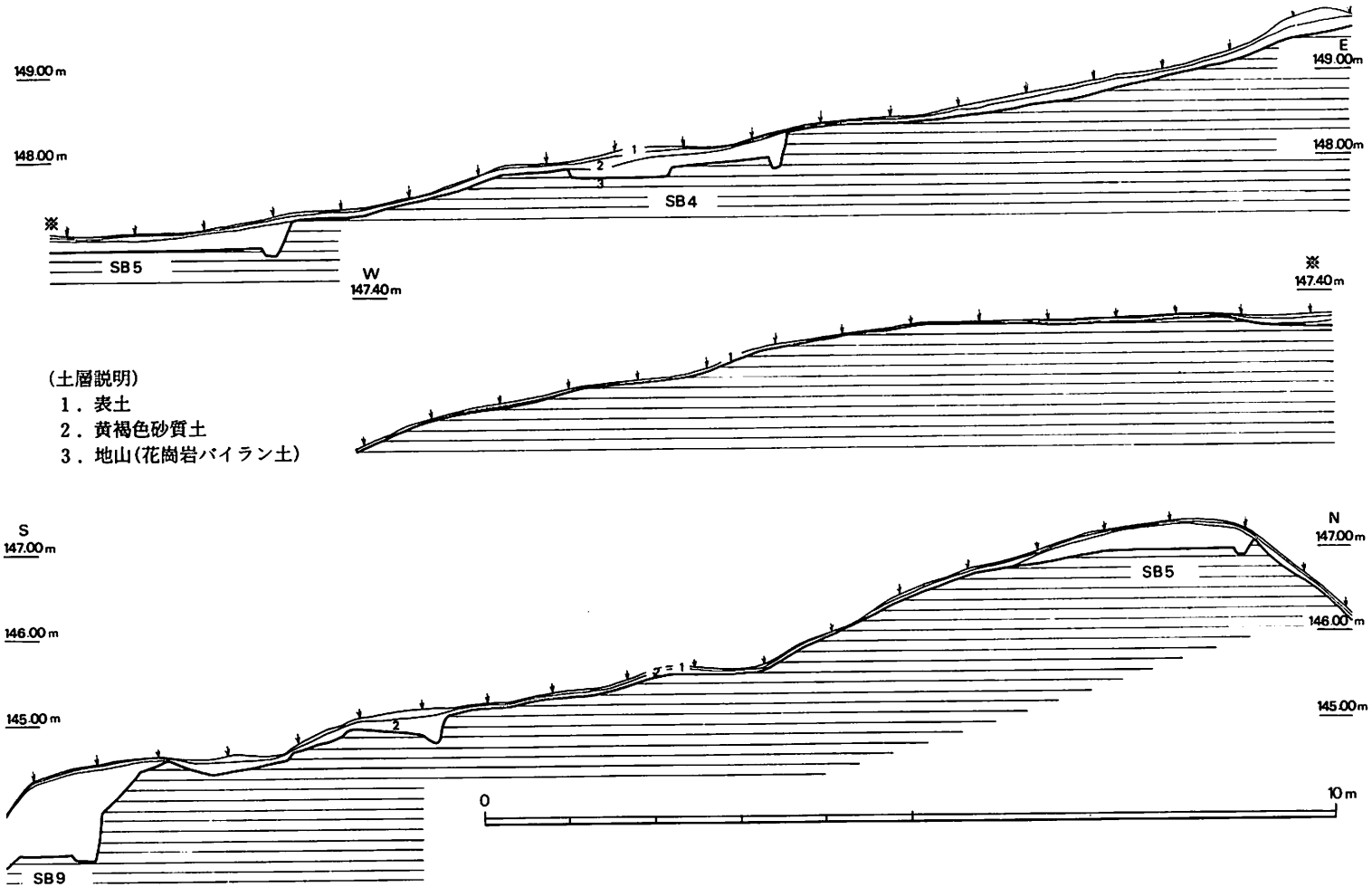
遺構の内訳は，竪穴式住居跡10軒・土坑３基・性格不明遺構１である。このうち，尾根頂部には竪穴式住居跡５軒（ＳＢ１～ＳＢ５）・土坑２基（ＳＫ11・ＳＫ12）・性格不明遺構１（ＳＸ14)が，また，南斜面下方には竪穴式住居跡５軒(ＳＢ６～ＳＢ10)・土坑１基(Ｓ



第18図　畳谷東遺跡周辺地形図(１：2,000)　アミ目は調査区を示す



第19図　畳谷東遺跡遺構配置図(1：200)



第20図　畳谷東遺跡土層断面図(1：80)

K13）が各々存在する。出土遺物としては，弥生土器(甕・壺・鉢・高杯・手捏(つく)ね土器)・土製品・石器・鉄器がある。

調査は，尾根主軸に沿う基準線を任意に設定し，この基準線をもとに調査区全体に５×５ｍを一単位とするメッシュをかぶせ，このメッシュ単位で調査をすすめた。

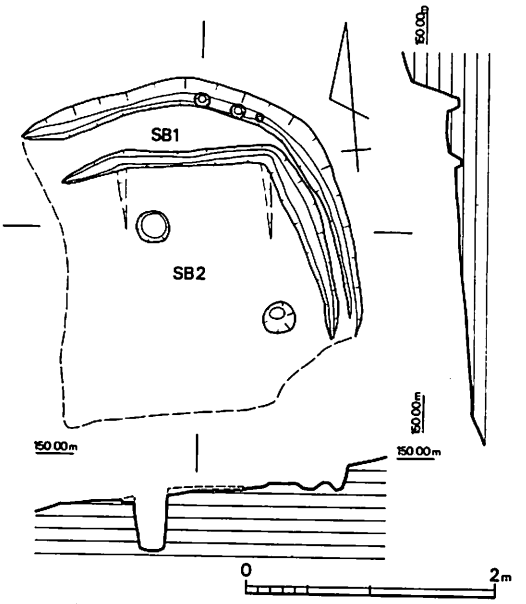
２．遺構と遺物

(1) 竪穴式住居跡

ＳＢ１・ＳＢ２（第21図，図版11ｂ）

東から西にむかって緩かに下傾する尾根頂部から僅かに下った南斜面上端に位置する住居跡で，２軒が重複している。住居跡の中でも最高所（標高150m）に位置する。

ＳＢ１はＳＢ２に外接するように存在し，その西側が流失し原形の¼程度を残す。残存する壁の描くカーブから推定して，平面形は円形を呈する住居跡と考えられる。壁高は，最も残りの良い箇所で28cmで，壁溝は上端幅10～25cm，深さは最深６cmである。壁溝内には，径６～12cm，深さ４～８cmの小ピット３個が存在する。ＳＢ２はＳＢ１に内接し，その東北コーナー部分を残す住居跡である。若干東辺の壁溝は外側にひろがり気味であるが，現状では北辺1.7m，東辺1.6mの規模をもつ平面形が方形を呈する住居跡である。壁は，ＳＢ１の床面によって削平され僅かに壁溝を残すにすぎない。壁溝の規模は，上端幅10～24cm，深さは最深10cmである。床面には計２個のピットが存在するが，ＳＢ１・ＳＢ２のいずれの住居跡に属するかは判然としない。このピットの規模は，ともに径は25cmで，深さは27cm及び44cmである。なお，ＳＢ１とＳＢ２の新旧関係については，ＳＢ２が古く，ＳＢ１が新しい。遺物としては，ＳＢ１から弥生土器が若干出土しているが，器種・時期等は不明である。

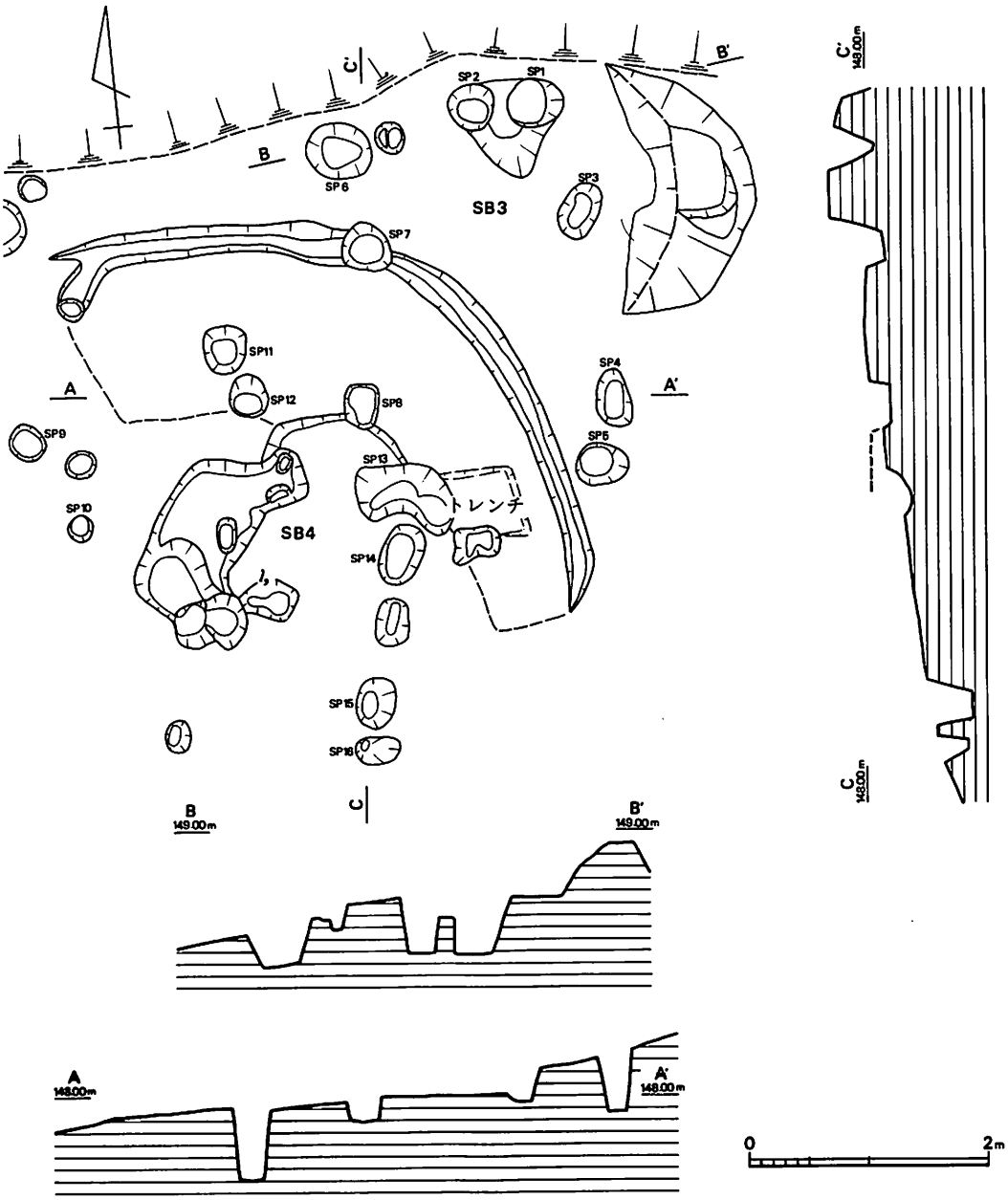


第21図　畳谷東遺跡ＳＢ１・ＳＢ２
実測図（１：60）

ＳＢ３（第22図，図版12ａ）

尾根頂部に位置する住居跡で，ＳＢ１・ＳＢ２の西方4.5mの距離にあり，ＳＢ４と重複している。ＳＢ４の北側，より高位の標高148mの尾根頂部にあり，北は崖に臨む。床面・壁の大半を崖面及び自然流失により失っており，東壁を僅かに残すだけである。壁高は，最も残りの良好な箇所で61cmである。壁面の中央に１～２段の平坦面が認められるが，壁溝は認められない。南側の床面はＳＢ４によって切られている。ＳＢ３床面上及びＳＢ４床面上に，

ＳＢ３の柱穴と想定される８個のピット（ＳＰ１～ＳＰ８）が存在する。これらのピットの規模は，ＳＰ１（長径46cm，短径41cm，深さ48cm），ＳＰ２（長径39cm，短径38cm，深さ48cm），ＳＰ３（長径47cm，短径31cm，深さ62cm），ＳＰ４（長径50cm，短径29cm，深さ51cm），ＳＰ５（長径45cm，短径34cm，深さ40cm），ＳＰ６（長径54cm，短径47cm，深さ44cm），ＳＰ７（長径43



第22図　畳谷東遺跡ＳＢ３・ＳＢ４実測図（１：60）

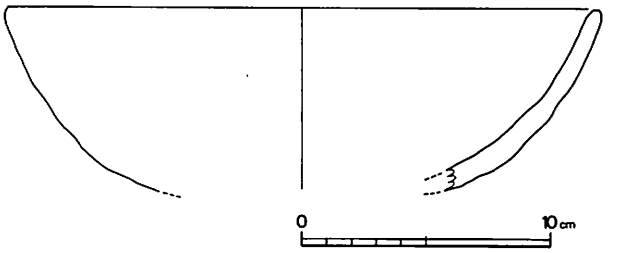
cm，短径38cm，深さ47cm)，ＳＰ８（長径38cm，短径28cm，深さ20cm）である。本住居跡は，これら柱穴の配置状況からみて，方形ないし長方形に支柱を配列していたものと考える。また，住居跡の平面形については壁の残存状況が良好でないため不明である。住居跡に伴って弥生土器片若干が出土しているが，住居跡の所属時期は不明である。

ＳＢ４（第22図，図版12ａ）

尾根頂部から南斜面にかけての傾斜変換線上の標高148ｍに位置する住居跡で，ＳＢ３に南接し，その床面を掘りこんで造られている。西から南にかけて壁及び床面を大きく自然流失により失っており，原形の東北隅約⅓を残す。その残存する壁の描くカーブから推定して，本住居跡は平面形が円形を呈する住居跡である。壁高は，最も残りの良好な箇所で37cmである。壁溝は，上端幅16～34cm，深さは最深10cmである。床面には，柱穴と推定されるピットが20個程度存在する。これらのピットの規模は径20～50cm，深さ13～68cm程度である。このうち，主柱穴と考えられるピットはＳＰ９～ＳＰ16の８個であり，これらの配置状況から考えて，本住居跡は円形に主柱を配置していたものと考えられる。しかも，その配置にはＳＰ９――ＳＰ11――ＳＰ13――ＳＰ15と並ぶもの（柱間1.80～1.94ｍ）と，その内側にＳＰ10――ＳＰ12――ＳＰ14――ＳＰ16と並ぶもの（柱間1.66～1.74ｍ）との２様が認められることから建て替えを１度行っている可能性が強い。各主柱穴の規模は，ＳＰ９(長径33cm，短径27cm，深さ36cm)，ＳＰ10(長径22cm，短径20cm，深さ13cm)，ＳＰ11(長径40cm，短径36cm，深さ68cm)，ＳＰ12(長径36cm，短径32cm，深さ61cm)，ＳＰ13(長径60cm，短径36cm，深さ52cm)，ＳＰ14(長径53cm，短径36cm，深さ48cm)，ＳＰ15(長径43cm，短径32cm，深さ42cm)，ＳＰ16(長径38cm，短径26cm，深さ31cm)，である。これらの柱穴群に囲まれた床面中央には，不整長方形の浅い土坑が存在する。その規模は，長軸185cm，短軸110cm，深さ11～25cmである。この住居跡に伴って弥生土器片少量が出土しているが，その器種・時期等は不明である。

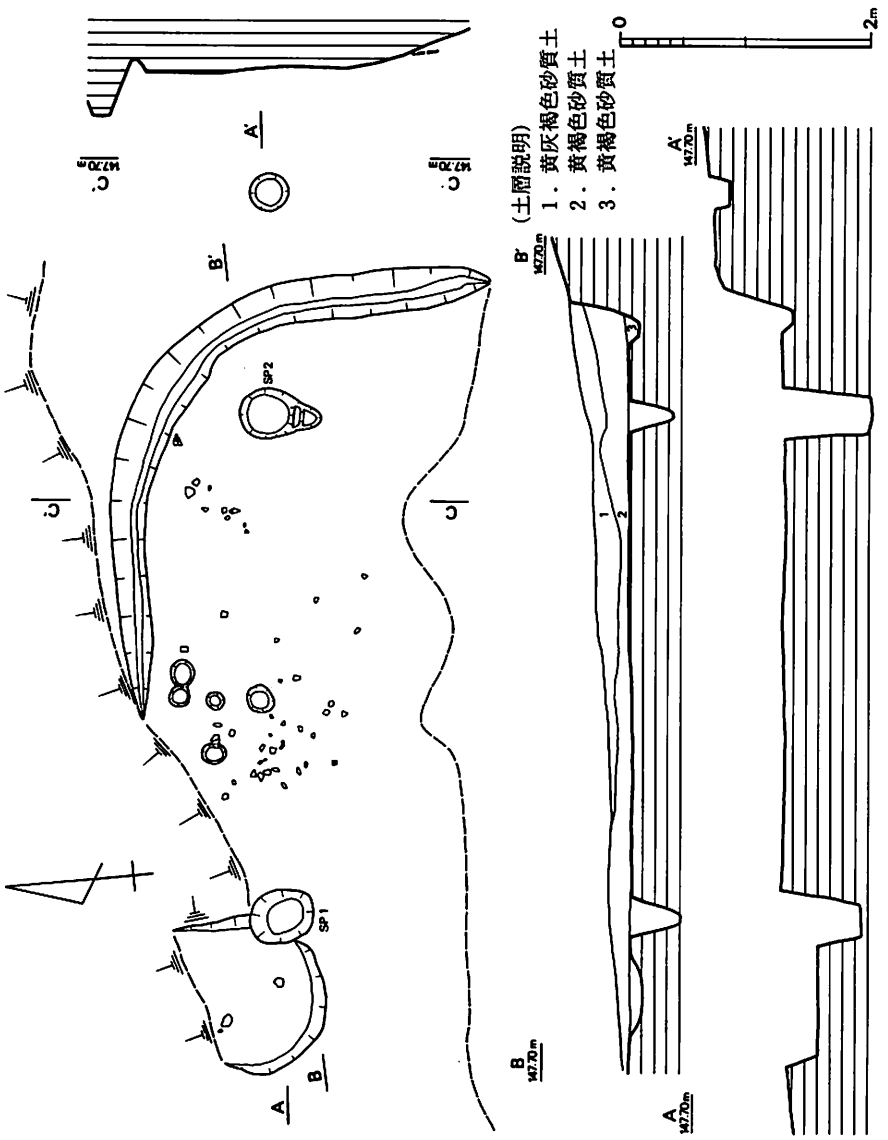
ＳＢ５（第24図，図版12ｂ）

ＳＢ４に西接して存在する住居跡で，標高147ｍの尾根頂部に位置する。北側は崖に接し，壁・床面の大半を自然流失によって失っており，現状は，その東北隅¼程度の壁・壁溝と北側½弱の床面が残存しているにすぎない。残存する壁の描くカーブから考えて，平面形は円形を呈する住居跡と推定される。壁高は最も残りの良い箇所で54cmである。壁溝の上



第23図　畳谷東遺跡ＳＢ５出土土器実測図(１：３)

端幅は25～40cm，深さは最深11cmである。床面には主柱穴と思われるピット２個（ＳＰ１・ＳＰ２）が存在し，その配置状況からみて，本住居跡は方形に主柱を配列した４本柱の住居跡と推定される。主柱穴の規模は，ＳＰ１(長径52cm，短径42cm，深さ71.5cm)，ＳＰ２(長径65cm，短径41cm，深さ71.5cm)である。その柱間距離は約４ｍである。なお，西端のＳＫ11との新旧関係は，ＳＢ５が古く，ＳＫ11が新しい。西半の床面を中心に弥生後期の土器片がややまとまって出土しているが，大半は小片のため器形等不明である。第23図は鉢と思われ，この土器から本住居跡の所属時期は弥生後期と考えられる。

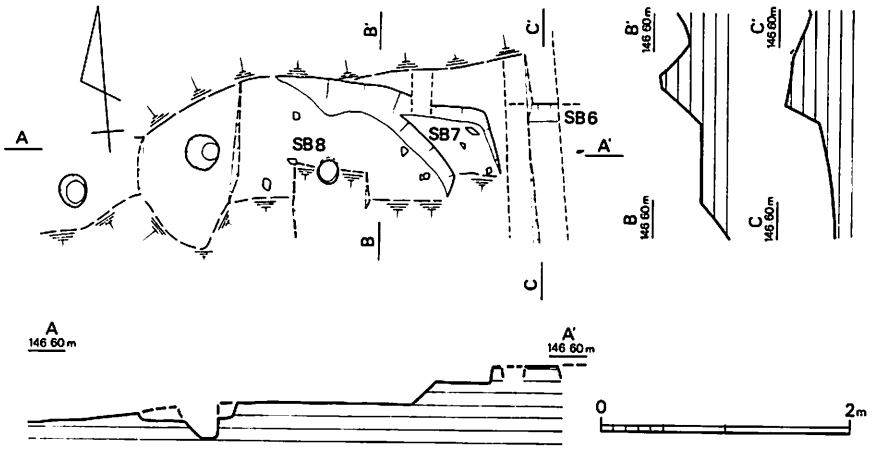


第24図　畳谷東遺跡ＳＢ５実測図(１：60)

ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８（第25図，図版13ａ）

東半南斜面の下端に位置する一群の住居跡で，尾根頂部に立地する住居跡群の真南６～７ｍの距離にある。北側を自然流水の流路で，南側は自然流失により各々大きく原形を失っており，南北0.5～1.1ｍの幅で壁・床面の一部を残すのみである(標高146～147ｍ)。

ＳＢ６は，土層観察によって，わずかにその存在を認め得た住居跡である。セクション・ベルトの東・西側をトレンチにより失っており，その規模・平面形については不明である。残存部分での壁高は29.5cmである。ＳＢ７はその東北コーナー部分をわずかに残すにすぎず，西側はＳＢ８と重複する。残存部分での壁高は16cmをはかる。壁の屈曲の仕方から推定すると，平面方形の住居跡であろう。ＳＢ８は住居跡群の西端に位置する住居跡で，ＳＢ７同様その東北隅の壁をごくわずかに残す。残存部分での壁高は，39.5cmである。ＳＢ７・ＳＢ８の新旧関係については，ＳＢ８が古くＳＢ７が新しい。なお，ＳＢ８の床面上に径16～29cm，深さ21.5～25cmのピット３個が存在する。いずれもその底面の標高はほぼ同一であり，一つの住居跡のものと考えられるが，いずれの住居跡に伴うか判然としない。これらの住居跡に伴って弥生土器片が出土しているが，いずれも器種・時期等不明である。



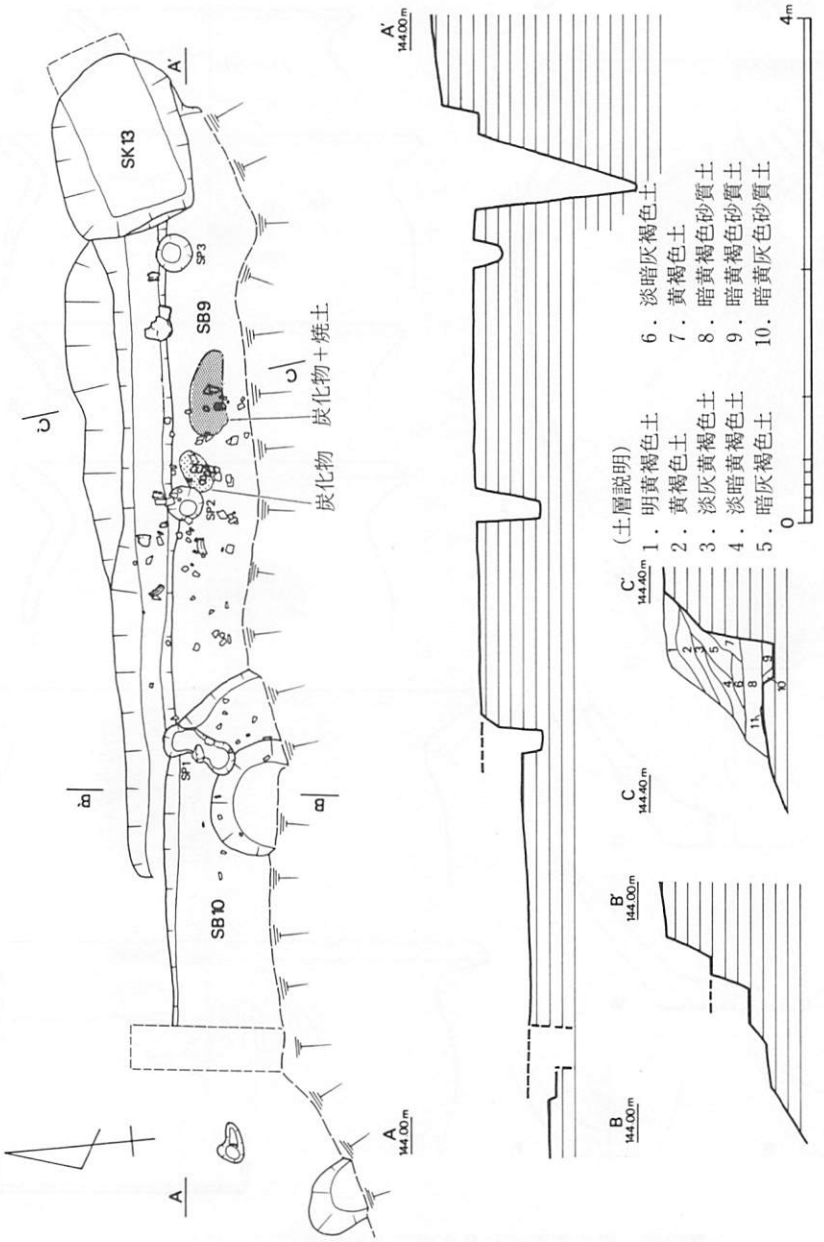
第25図　畳谷東遺跡ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８実測図(１：60)

ＳＢ９・ＳＢ10（第26図，図版14ａ）

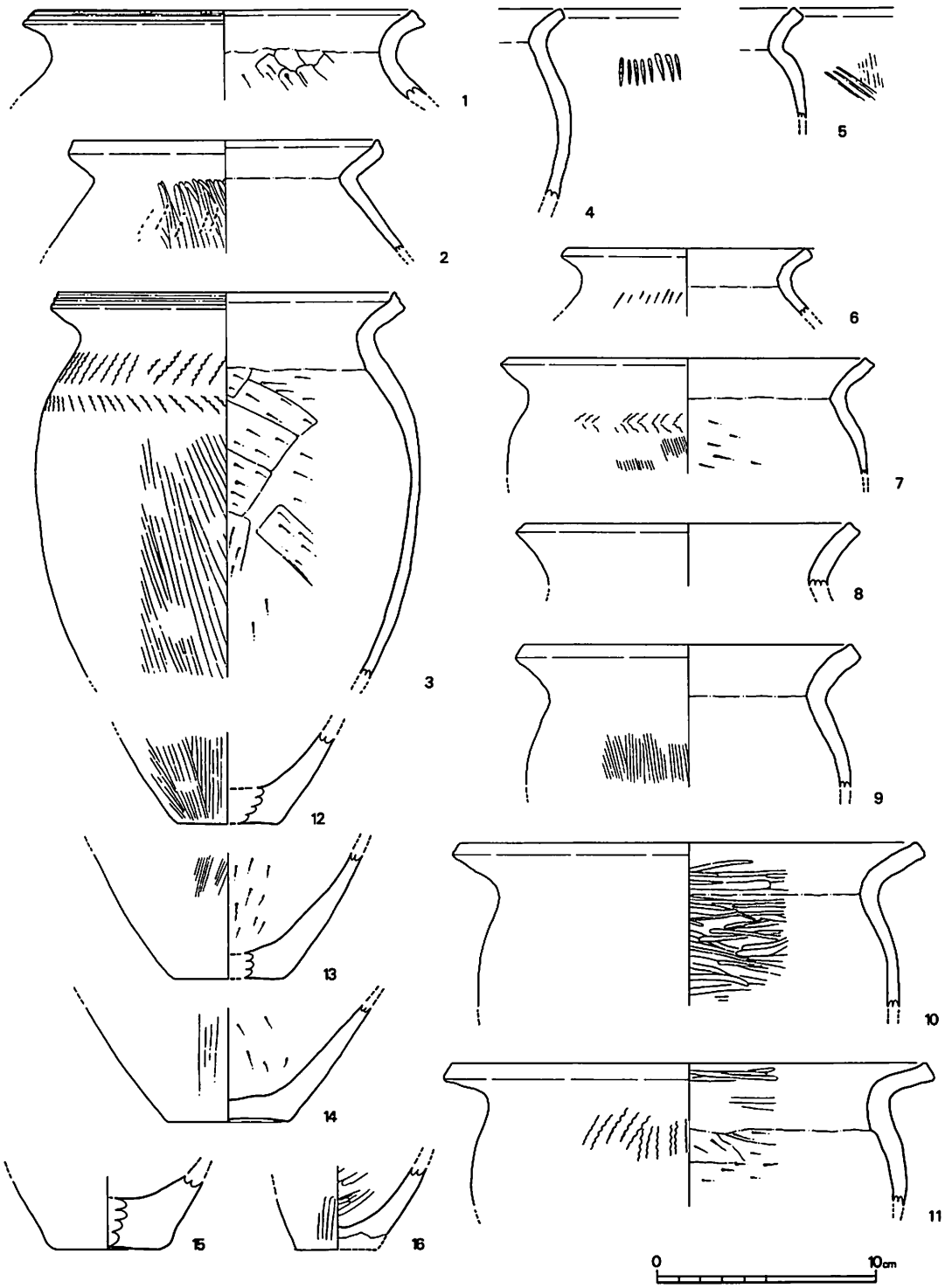
ＳＢ６～ＳＢ８と同じく南斜面下端に立地する住居跡で，その西半に位置する。尾根頂部に在るＳＢ５の真南約10ｍの距離にある。北側は，東から西に通る山道に接し，南側は，約40度の急斜面につらなる。住居跡のあるあたりの斜面の標高は，約143ｍである。

ＳＢ９は西端部でＳＢ10と切り合い，東北コーナー部分はＳＫ13によって切られている。西北コーナー部分は攪乱により失っている。現存規模は，東西6.3ｍ，南北1.04～1.40ｍの方形ないしは隅丸方形の住居跡である。北辺については，一旦法面状に最大44cmほど地山を斜めに掘り込んだのち，垂直に掘りさげて住居の壁としている。壁高は，最も残りの良好な箇

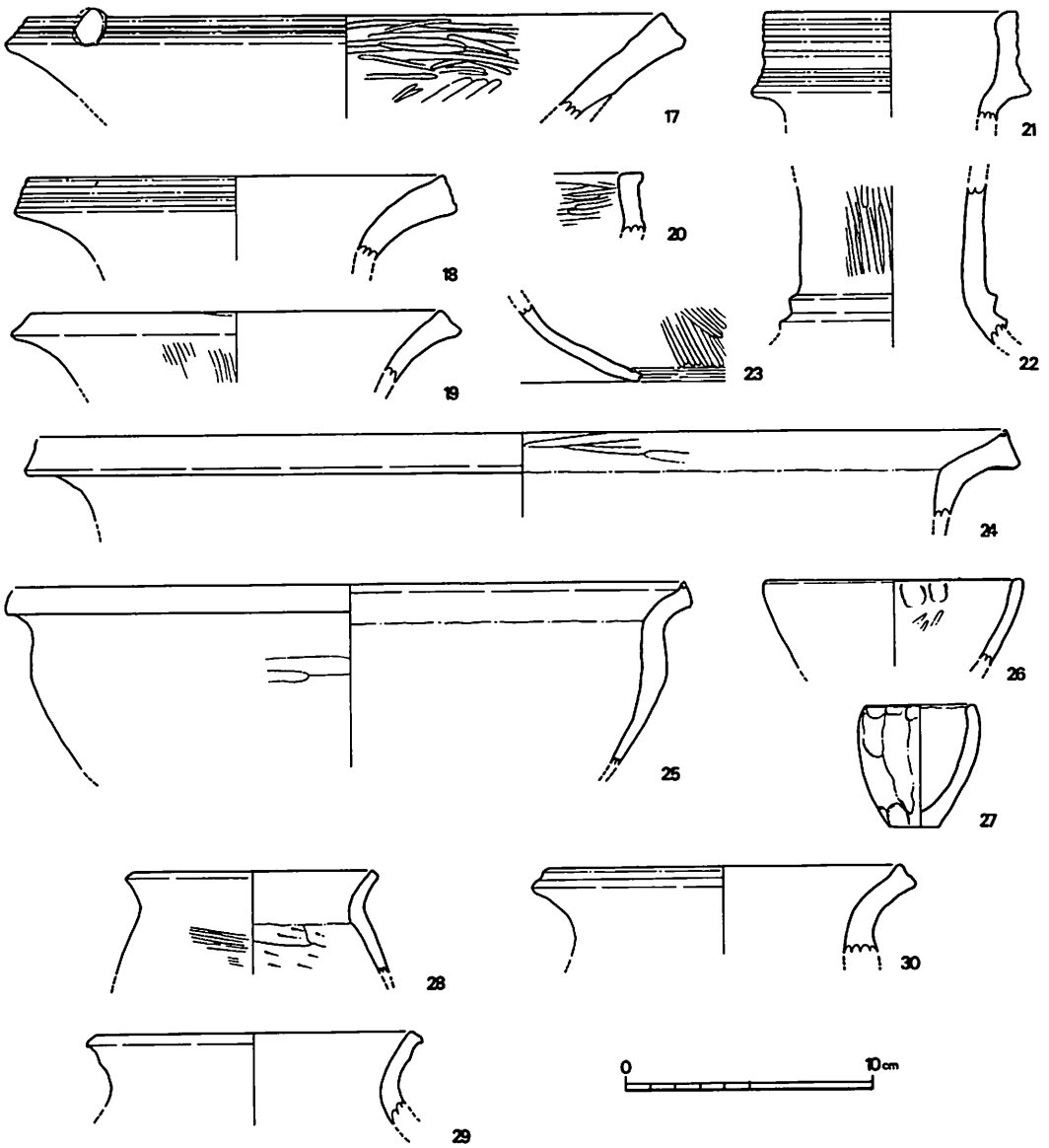
所で74cmである。壁溝は，上端幅35～45cm，深さ3.5cm～８cmである。床面には，この壁溝に近く東西方向に主柱穴と推定されるピット3個が並ぶ。これらのピットの規模は，ＳＰ１(長径28cm，短径26cm，深さ48cm)，ＳＰ２(長径29cm，短径26cm，深さ51cm)，ＳＰ３(長径31cm，短径26cm，深さ47cm)，である。その配置状況から，本住居跡は方形ないしは長方形(２間×α)に主柱を配置した住居跡で，柱間距離は1.86～2.02mである。なお，床面直上で炭化物あ



第26図　畳谷東遺跡ＳＢ９・ＳＢ10実測図(１：60)



第27図　畳谷東遺跡ＳＢ９出土土器実測図（１：３）



第28図　畳谷東遺跡ＳＢ９・ＳＢ10出土土器実測図（１：３）

るいは炭化物＋焼土のひろがりが２箇所存在する。前者が34×22cm，後者が66×32cmの規模である。この炭化物＋焼土の集中部の周辺で，弥生後期の土器片が集中的に出土した。

出土遺物としては，弥生土器及び鉄器がある。弥生土器（第27図１～第28図27）は甕・壺・鉢・高杯・手捏ね土器がある。甕は口縁の形態により大きく３形態にわけられるが，凹線文および口縁端部の肥厚のいずれもが消失した３類に属するものが顕著である。壺は口径を大きく開き，部厚い端面に凹線文あるいは凹線状の横ナデ調整を施すものがやや目立つが，第28図20・21のように複合口縁をもつもの，あるいは第28図22のように頸部に断面三角形の凸帯をもつ長頸壺がある。鉄器（第33図１）は，長さ3.9cm，幅0.9～1.4cm，厚さ0.5cmで，その用途は不明である。

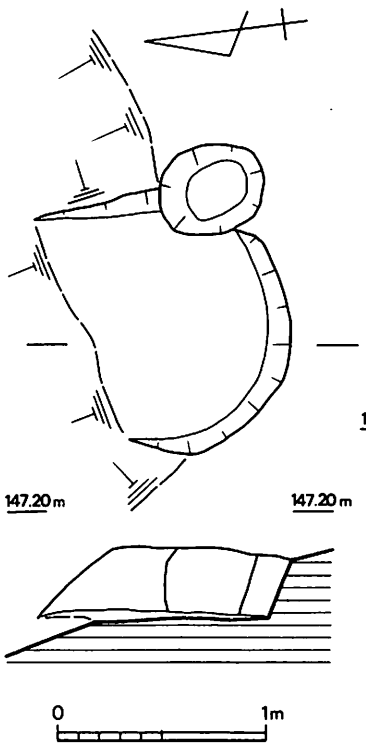
ＳＢ10はＳＢ９の西端部と切り合う住居跡で，その床面はＳＢ９のそれより30～40cm下位にある。北西コーナー部分及び西壁は攪乱により原形を失っている。現存規模は東西3.78m，南北0.88mである。壁高は，最も残りの良好な箇所で35cmである。壁溝及び主柱穴と推定されるピットは見られない。床面やや東寄りの位置で，炉跡かと思われる浅い土坑を検出した。その規模は径約26cm，深さ18cmで，平面形はほぼ円形を呈する。ＳＢ10からは弥生後期の土器片が出土している。甕（第28図28～30）が主体で，いずれも口縁端部は肥厚せず，端面が平坦なもので後述の３類の甕に属する。

ＳＢ９とＳＢ10の新旧関係は，ＳＢ10が古くＳＢ９が新しい。これらの住居跡の所属時期は，ほぼ弥生後期中葉と推定される。

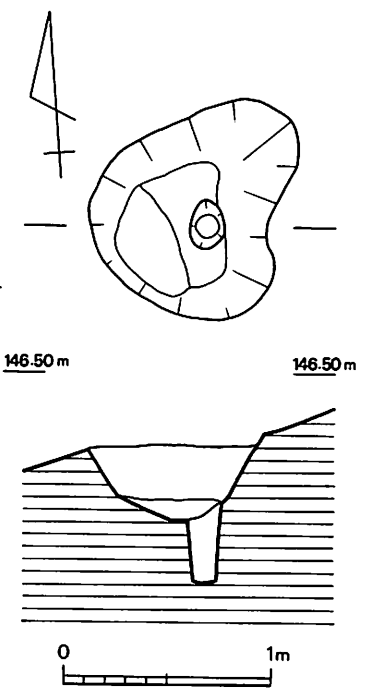
(2) 土坑

ＳＫ11（第29図，図版13ｂ）

調査区西北隅の尾根頂部に位置する土坑で，Ｓ



第29図　畳谷東遺跡ＳＫ11
実測図（１：40）

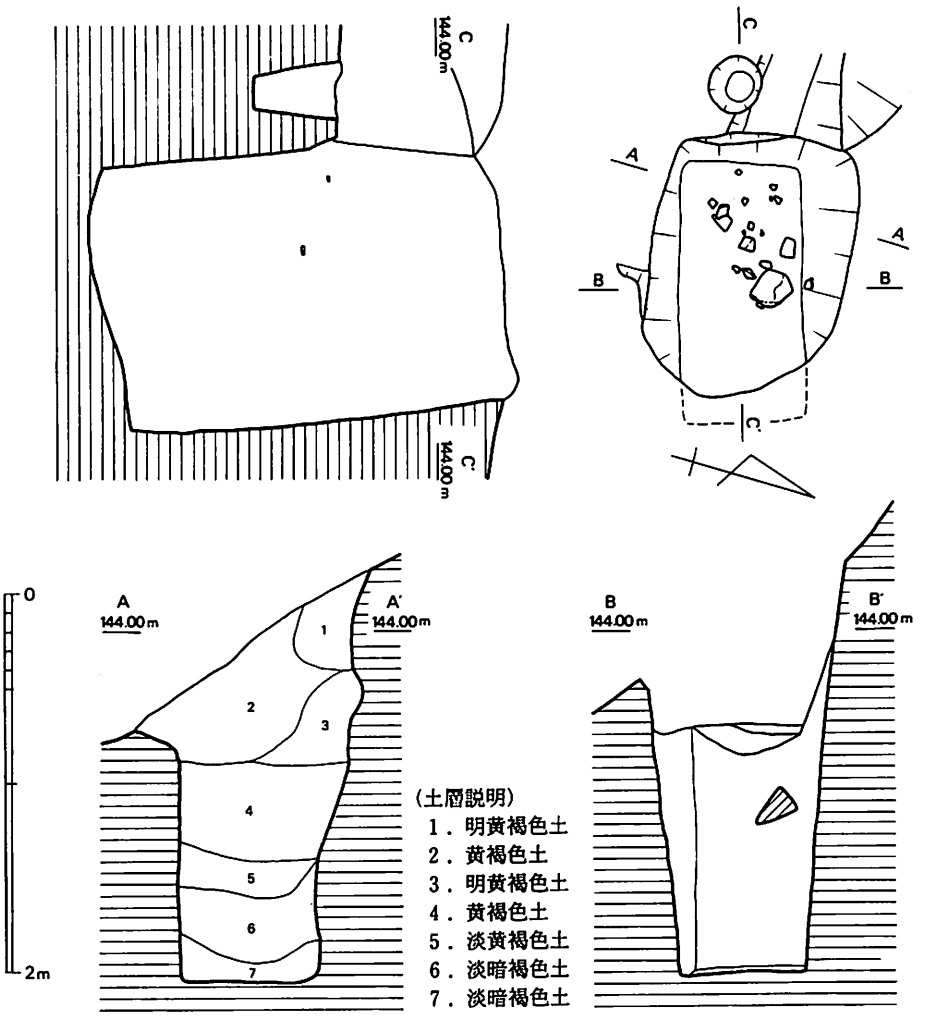


第30図　畳谷東遺跡ＳＫ12
実測図（１：40）

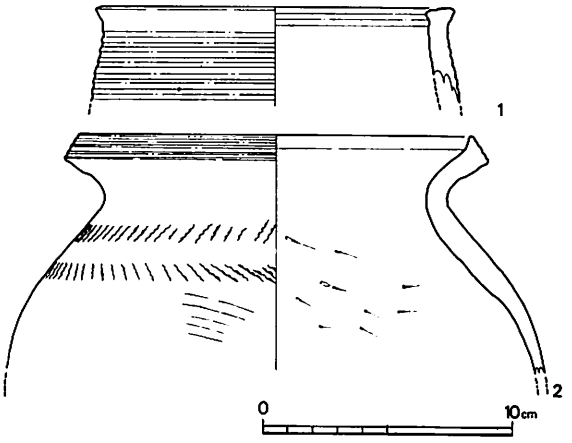
Ｂ５・ＳＫ12の西方約５ｍ，ＳＸ14の南方約0.6mの距離にある（標高146m)。平面形は不整円形で，長径120cm，短径98cm，深さ42cmの規模をもつ。底面は，平坦でなく椀底状を呈している。底面中央に，長径25cm，短径18cm，深さ38cmのピット１が掘り込まれている。出土遺物はない。

ＳＫ12（第30図，図版12ｂ）

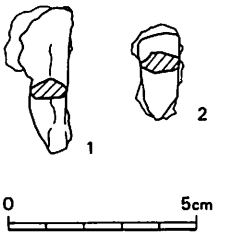
調査区北端中央の尾根頂部に立地する土坑で，ＳＢ５の床面を掘り込んで造られている。土坑の北半はすでに流失しており，その現存規模は東西128cm，南北123cm，深さは最も残りの良好な箇所で28cmである。平面形は，円形ないしは楕円形と考えられる。その底面は平坦で，断面逆台形である。ＳＢ５との新旧関係は，ＳＢ５が古くＳＫ12が新しい。坑内からは弥生



第31図　畳谷東遺跡ＳＫ13実測図(１：40)



第32図　畳谷東遺跡ＳＫ13出土土器
実測図（１：３）

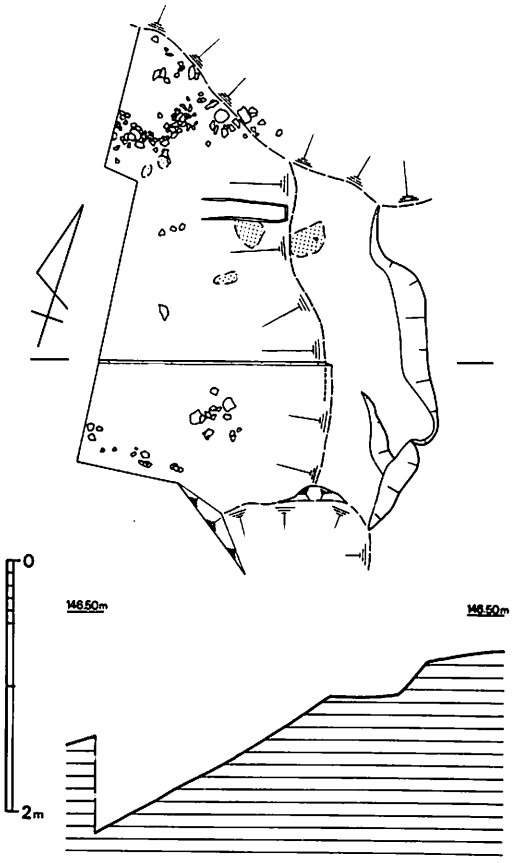


第33図　畳谷東遺跡出土
鉄器実測図（１：２）

土器片若干が出土しているが，器形・時期等不明である。

ＳＫ13（第31図，図版14ｂ）

調査区南端西半の急斜面に掘り込まれた土坑で，ＳＢ９の東北コーナー部分を壊して造られている。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸140cm，短軸51cm，深さ127～216cmである。東辺の底面が若干外側にふくらむ袋状を呈する。底面は，東辺が最も高く西辺にむかって13～22cm程下傾する。西辺から30cmほど東に寄ったあたりの底面が最も低く，若干凹む。坑内の土層はほぼ水平に堆積しており，底面に44～66cmほど淡暗褐色土が堆積し，その上には黄褐色系統の花崗岩バイラン土壌が堆積していた。坑内からは，少量の弥生後期の土器(第32図)・鉄器が出土している。鉄器（第33図２）は長さ2.25cm，幅0.9～1.1cm，厚さ0.5cmで，用途は不明である。ＳＢ９とＳＫ13との新旧関係は，ＳＢ９が古くＳＫ13が新しいと考えられ，ＳＫ13の所属時期はその出土土器の諸特徴から，弥生後期中葉頃と推定できよう。



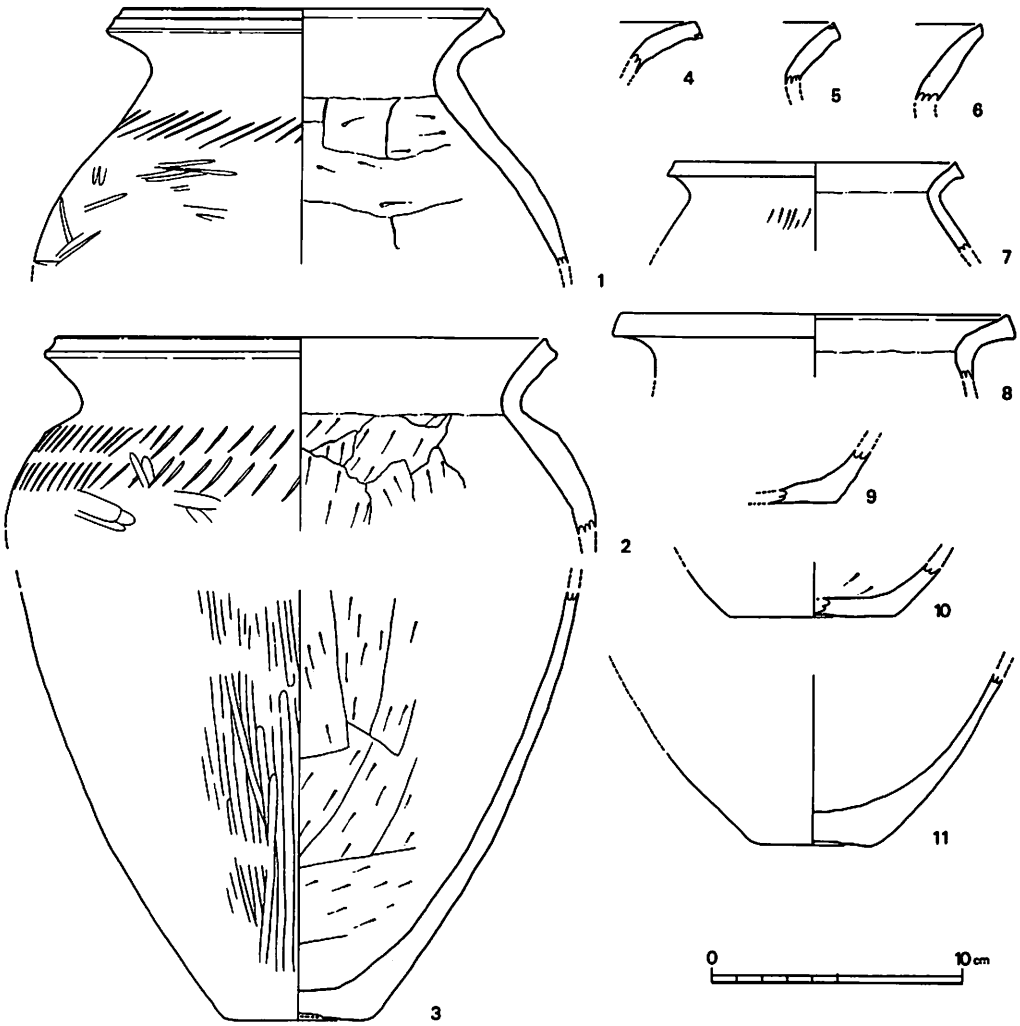
第34図　畳谷東遺跡ＳＸ14実測図（１：60）
アミ目は貝層を示す

(3) その他の遺構・遺物

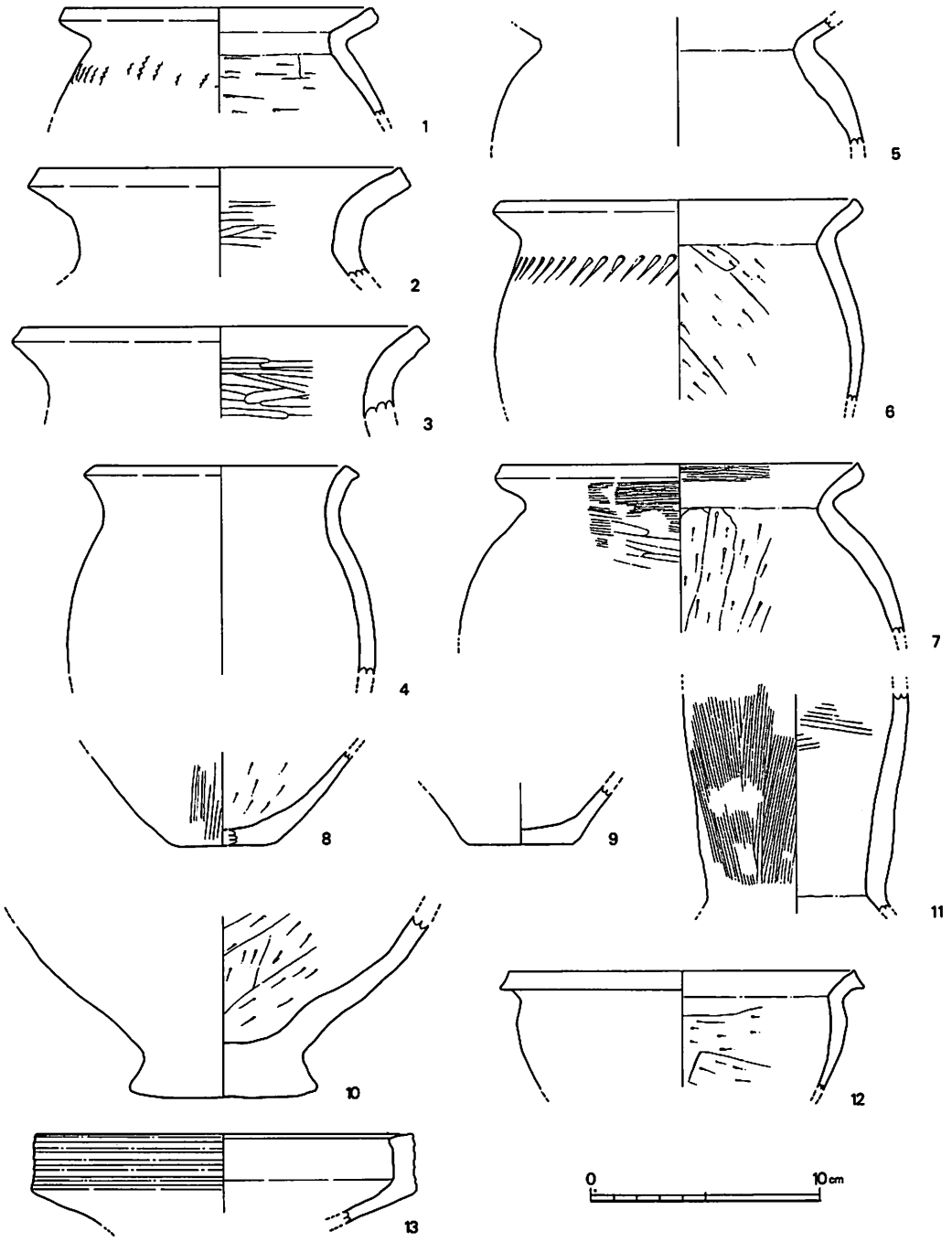
ＳＸ14（第34図，図版14c）

調査区西北隅に位置している性格不明の遺構である。尾根頂部から西北方向に下る斜面上端にあり，ＳＢ５の西北西約７ｍ，ＳＫ11の北方0.6mの距離にある（標高145～146m）。南北を崖面等で失い，また，西側も調査区域外に及ぶために全容はつかめないが，長さ2.6m，幅0.7～0.84mにわたって地山を掘りこんで平坦面を作り，平坦面は30度の角度の斜面につづく。壁高は最大25.5cmで，斜面では北半部を中心に比較的多くの弥生土器片が出土した。そのほか，斜面中央部を中心に３箇所の貝殻の散布がみられ（範囲は径20～30cm程度），また，赤化した土のひろがり２箇所が認められた。出土遺物は，弥生土器（甕・壺），貝殻のみである。

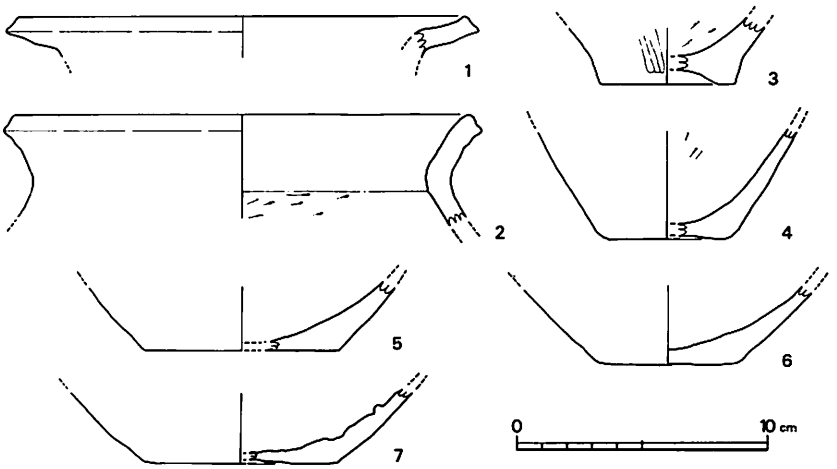
このＳＸ14については上面の平坦面を造り出した住居状の部分と，斜面の土器・貝殻が堆



第35図　畳谷東遺跡ＳＸ14出土土器実測図（１：３）



第36図　畳谷東遺跡調査区出土土器実測図(1)(１：３)

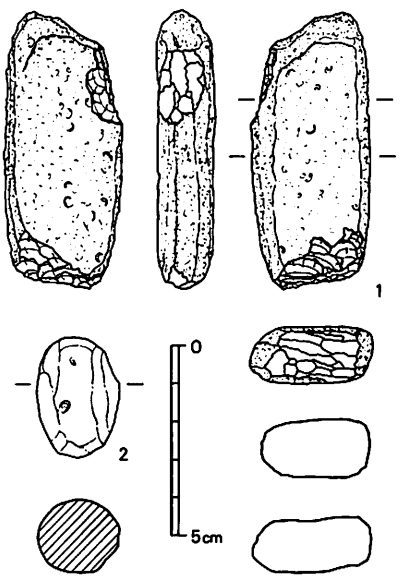


第37図　畳谷東遺跡調査区出土土器実測図(2)(１：３)

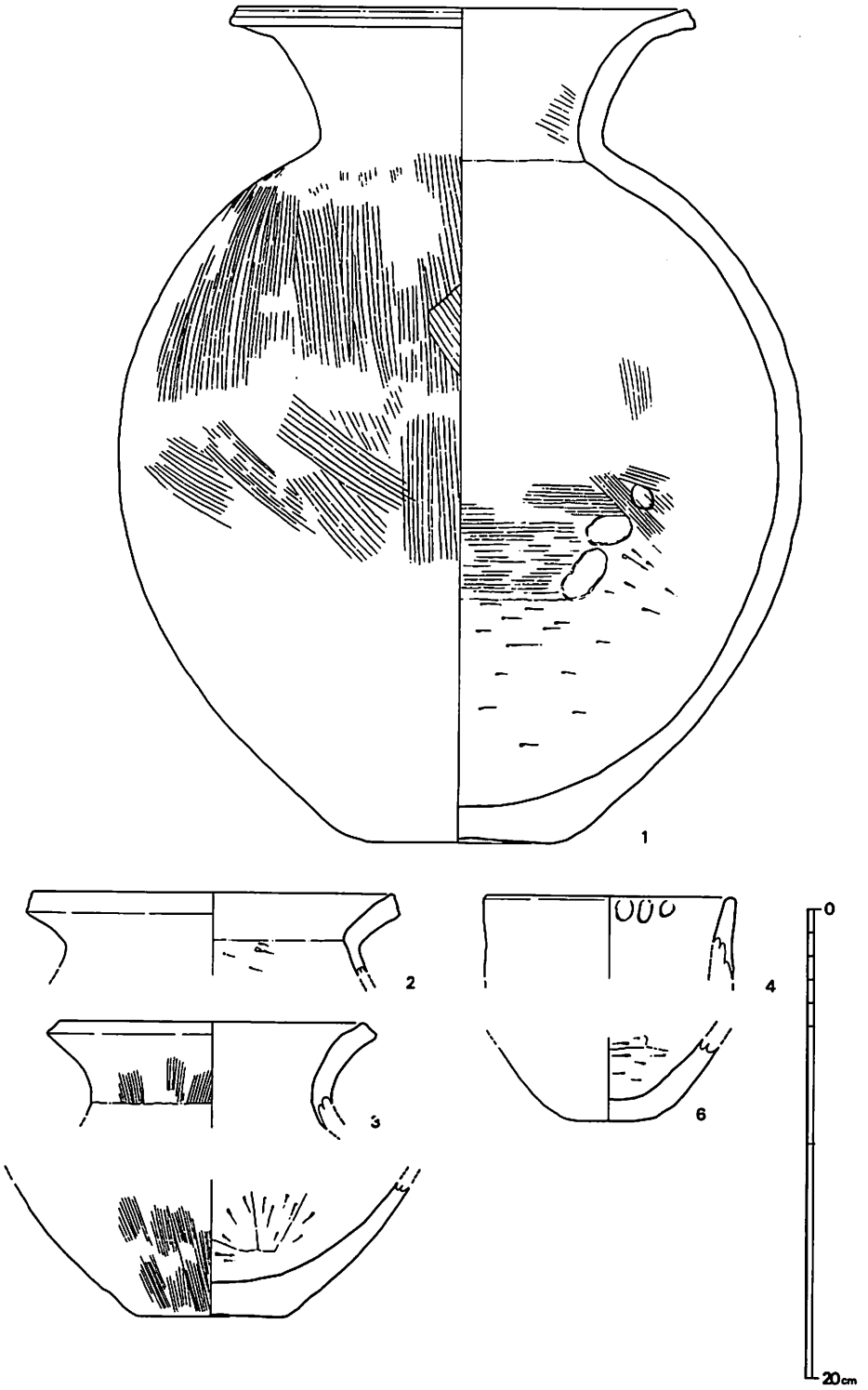
積した部分から成り，特に後者については単なる斜面堆積あるいは廃棄物であるのかなどその性格については不明な部分が多いが，現状では住居跡・土器溜りなどを含めて一つの遺構として捉えておきたい。そして，その所属時期は，土器(第35図)が示すところの弥生後期中葉を中心とした時期と考えられる。

調査区・遺跡周辺出土の遺物（第36～39図）

調査区出土とした遺物の大半は，表土及び自然流路内埋土，ＳＢ９・ＳＢ10南斜面出土，そして表採品であり，弥生土器(甕・壺・鉢・高杯)・石器・土製品がある。土器はいずれも弥生後期中葉頃のものである。石器（第38図１）は，ハンマーストーンと考えられ，長さ7.3cm，幅3.15cm，厚さ1.4cmの扁平な淡黄白色の自然礫を用いている。自然礫の端部及び側面端部に各々顕著なつぶれ痕が観察される。石材は不明である。土製品(第38図２）は，長さ3.1cm，径2.1×1.95cmの楕円球状のもので，表面上にナデつけ状の痕跡がある。淡黄褐色を呈す。第39図はいずれも畳谷東遺跡の南方の地点で表採したものであり，弥生後期中葉を中心とした時期のものである。



第38図　畳谷東遺跡調査区出土
石器・土製品実測図(１：２)



第39図　畳谷東遺跡周辺出土土器実測図(1：3)

第6表　畳谷東遺跡出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
第23図 SB5	鉢	口径　24.0	体部は内湾気味に外上方に立ちあがり，口縁端部を丸くおさめる。	口縁端部の内・外面はやや粗い横ナデ調整。体部内面は横ナデ調整，外面は板状工具によるナデ調整。	色調淡赤黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存1/10
第27図 1 SB9	甕	口径　18.4 頸径　15.8	くの字状に外反する口縁端部を僅かに上下に肥厚させ，端面に2～3条の凹線をめぐらす。	口縁内・外面は横ナデ調整。頸部内面は若干斜位気味の縦位ヘラ削りを施す。外面は刷毛目調整か。	色調淡赤黄褐色～淡黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を多含。 焼成良好 残存1/4
2 SB9	甕	口径　14.4 頸径　12.0	口縁部はくの字につよく屈曲し，端部を若干上方に肥厚させている。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部内面はヘラ削り，外面は若干斜位気味の縦位ヘラミガキ調整の上から斜位に櫛歯状工具による刺突文を施す。	色調淡茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存1/4
3 SB9	甕	口径　16.2 頸径　13.4 胴部最大径 18.2	くの字状に外反する口縁瑞部を上方に肥厚させ，その端面に1～2条の凹線を廻らす。胴部最大径は肩部にあるために，やや肩の張る形態である。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面は，肩部にくの字状に貝殻腹縁による刺突文を廻らす。その下位には斜位気味に縦位刷毛目を施す（4条／cm)。胴部内面は横位あるいは斜位ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存口縁部～胴部下半1/3
4 SB9	甕	口径　不明	くの字状に短かく外反する口縁部をもち，その端面は平坦である。	口縁内・外面とも横ナデ調整。胴部外面は肩部に板状工具による刺突文，内面は横位ヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存小破片。
5 SB9	甕	口径　不明	くの字状に短かく外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ，その端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。肩部外面に縦位あるいは斜位の刷毛目状の調整を施す。	色調淡茶褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存小破片。
6 SB9	甕	口径　11.4 頸径　9.5	口縁部はくの字状に外反し，端部が僅かに上下に肥厚する。端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面は肩部に斜位の板状工具による刺突文を施す。内面はヘラ削り。	色調淡黄褐色～暗黄褐色。 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存1/4
7 SB9	甕	口径　17.1 頸径　14.5	くの字状に外反する口縁端部を僅かに上下に肥厚さす。その端面は浅い凹線状を呈す。	口縁内・外面横ナデ調整。胴部外面は肩部にくの字に2列の貝殻腹縁による刺突文を，その下位には斜位気味の縦位	色調淡赤黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
				刷毛目を施す(9～10条／cm)。	残存¼
第27図 8 SB9	甕	口径 15.7	くの字状に外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ，その端面は横ナデ調整により幅広く中央が凹む。	内・外面ともに横ナデ調整。	色調淡黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅙
9 SB9	甕	口径 15.8 頸径 12.6	くの字状に外反する口縁部の端面は平坦である。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面は縦位刷毛目（6条／cm),内面はヘラ削り。	色調淡灰色 胎土2㎜以下の砂粒やや多し。 焼成良好 残存小破片
10 SB9	甕	口径 21.5 頸径 17.3	くの字状に外反する口縁端部近くの内面が若干凹む。その端面は横ナデ調整により中央が僅かに凹む。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部内面はヘラ削りののち横位ヘラミガキを密に施す。外面は不明確だがヘラミガキか。	色調黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存⅛
11 SB9	甕	口径 22.3 頸径 18.3	頸部から強く屈曲してくの字状に外反する口縁端部を上方に若干肥厚させる。その端面を平坦におさめる。	内面は口縁から頸部にかけて横位ヘラミガキ，胴部は横位ヘラ削り。外面は口縁から頸部にかけて横ナデ，肩部には貝殻腹縁による刺突文を施す。	色調茶褐色 胎土1㎜大の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅐
第28図 17 SB9	甕	口径 27.4	直線的に外上方にのびる口縁端部を下方に若干肥厚させ，その端面に浅い3条の凹線を廻らす。口縁端面に円形浮文を貼付。	外面横ナデ調整，内面は横位ヘラミガキ。	色調淡暗赤褐色 胎土2㎜以下の砂粒を多含。 焼成良好 残存⅕
18 SB9	甕	口径 17.8	外上方にほぼ直線的にのびる口縁端部を上下に僅かに肥厚さす。その端面に3条の凹線を廻らす。	器壁の損耗著しく調整不明。	色調淡黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を多含。 焼成良好 残存⅛
19 SB9	甕	口径 18.2	ほぼ直線的に外上方にひろがる口縁端部を上下に肥厚さす。その端面は中央が若干凹む。	胴部外面は粗い縦位刷毛目（6条／cm）を施す。	色調淡黄褐色～淡灰褐色 胎土精良 焼成やや不良
20 SB9	壺	口径 不明	複合口縁の壺の口縁部か。若干内傾気味に立ちあがり，端部は外方につよく肥厚さす。その端面は平坦である。	外面はごく僅かに横ナデ調整による凹線状の凹みが3条廻る。内面は横位ヘラミガキ。	色調淡茶褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
21 SB9	壺	口径 10.3	複合口縁の壺の口縁部。垂直に立ちあがる。	立ちあがり部外面は6条の浅い凹線。内面は横ナデ調整。	色調黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
					焼成良好 残存⅙～⅕
第28図 22 SB9	壺	頸径 7.4	長頸壺の頸部か。頸部下端に2段の断面三角形の突帯を付す。	外面縦位ヘラミガキ，内面は器壁の損耗著しく，調整不明。	色調赤黄褐色～黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅓
24 SB9	鉢	口径 40.2	くの字状に外上方に強く屈曲する口縁端部を上下に肥厚させ，その端面は幅広く中央が凹む。	口縁内・外面，胴部外面は横ナデ調整。胴部内面はヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を多含。 焼成良好 残存⅙～⅛
25 SB9	鉢	口径 頸径	頸部から外上方に外反する口縁端部を僅かに上下に肥厚させる。その端面は中央に幅広い凹部がみられる。	口縁内・外面，胴部上半の外面は横ナデ調整。胴部下半の外面は横位ヘラミガキか。内面は指頭による強いナデ。	色調淡黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒をやや多く含む。 焼成やや不良 残存¼
26 SB9	鉢	口径 10.5	体部から内湾気味に外上方に立ちあがる口縁部で，その端部は内傾している。	内面ヘラミガキ。外面は器壁の損耗のため，調整不明瞭。	色調淡黄褐色～淡赤黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存⅛
23 SB9	高杯	脚端径不明	高杯の脚端部か。外下方に大きく外反して開き，端面は平坦で，その中央が横ナデにより若干凹む。外面の端部で1条の凹線がめぐる。	内面から外面端部にかけて横ナデ調整，外面は斜位気味の縦位ヘラミガキを施す。	色調黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
27 SB9	手捏ね土器	口径 4.4 底径 1.95 器高 4.95	甕形。平底の底部からやや内湾気味に外上方に立ちあがる。端部は丸くおさめる。	内・外面とも縦方向の指頭によるナデを行う。	色調淡褐色～淡灰褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存完形
12 SB9		底径 4.6	底部片。平底の底部から若干内湾気味に外上方に立ち上る。	全体に磨滅が顕著で不明瞭だが，外面は縦位あるいは斜位刷毛目(4～5条／cm)。	色調淡赤黄褐色～淡黄灰色 胎土比較的精良 焼成良好 残存⅓～¼
13 SB9		底径 5.0	平底の底部から若干内湾気味に外上方に立ちあがる。	外面縦位刷毛目，内面縦位ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色～明黄褐色 胎土2㎜以下の

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
					砂粒を多含。 残存⅓～¼
第27図 14 SB9		底径 5.4	底部片。若干あげ底気味の底部からほぼ直線的に外上方に立ちあがる。	全体に器壁が荒れて不明確だが，外面縦位刷毛目，内面ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存¾
15 SB9		底径 4.6	底部片。部厚い平底。	調整不明瞭。	色調淡黄褐～淡赤褐色 胎土比較的精良 焼成やや不良 残存¼
16 SB9		底径(推定) 3.7	平底か。	外面不明確。内面縦位ヘラミガキ。	色調茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅔
第28図 28 SB10	甕	口径 10.1	くの字状に外反する口縁端部の端面を平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面は横位刷毛目，内面は横位ヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅛
29 SB10	甕	口径 13.5	くの字状にゆるく外反する口縁端部を下方に肥厚させる。端面は平坦。	内・外面とも横ナデ調整。	色調茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅛
30 SB10	甕	口径 15.6	外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ，平坦な端面中央に幅広の凹線1条がめぐる。	内・外面とも横ナデ調整。	色調明茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒を多含。 焼成良好 残存⅙
第33図 1 SK13	壺	口径 14.4	無頸壺の口縁部。若干内傾して直線的に立ちあがる口縁端部を内・外方にややつよく肥厚させる。若干内傾気味だがほぼ水平な口縁端面には横ナデによるごく浅い凹線状の凹み2条がめぐる。	内・外面とも横ナデ調整。外面には7条以上の凹線がめぐる。	色調淡黄褐色 胎土精良 焼成良好 残存⅕～⅙
2 SK13	甕	口径 17.0 頸径 13.8	くの字状に外反する口縁端部を上・下方に肥厚させる。その端面には3～4条の凹線をめぐらす。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面は肩部に貝殻腹縁による斜位の刺突文が2段くの字状にめぐる。この刺突文の	色調淡赤黄褐色～淡黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
				下位にはヘラミガキか。胴部内面はヘラ削り。	焼成やや不良 残存⅙～⅙
第35図 2 SX14	甕	口径 20.4 頸径 17.5	くの字状に外反する口縁端部を僅かに肥厚させ，その平坦な端面中央に幅広の凹線状の凹みが1条めぐる。やや肩が張る。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面は肩部に2段の，ヘラ状工具による斜位刺突文を，その下位にはヘラミガキを施す。内面は斜位あるいは縦位ヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存¼～⅓
3 SX14	甕	底径 6.0	若干上げ底気味の底部から内湾気味に外上方に立ちあがる胴部をもつ。	外面縦位ヘラミガキ，内面縦位ヘラ削り。	色調淡黄褐色～淡赤黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存½強
4 SX14	甕	口径 不明	口縁端部を下方に若干肥厚させている。その端面に2条の凹線がめぐる。	調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
5 SX14	甕	口径 不明	口縁端部を下方に肥厚さす。	外面横ナデ調整，内面は調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
6 SX14	甕	口径 不明	直線的にのびて端部が先細りになる口縁部で，その端面は外傾する。	調整不明瞭。	色調淡赤褐色～淡黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
7 SX14	甕	口径 不明	くの字状に外反する口縁端部を上・下に肥厚させ，平坦な端面の中央に浅く1条の凹線がめぐる。	口縁内・外面は横ナデ調整。	色調茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
8 SX14	甕	口径 16.0 頸径 12.6	くの字状に外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ，端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。	色調淡明黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存1/10
1 SX14	壺	口径 16.0 頸径 12.8	くの字状に外反する口縁端部を上下に肥厚させ，その端面に2条の凹線をめぐらす。	口縁内・外面は横ナデ調整。肩部外面に1条のヘラ状工具による斜位刺突文，その下位には横位・斜位のヘラミガキ。頸部内面は指頭ナデつけ，胴	色調淡茶褐色 胎土3㎜以下の砂粒やや多含 焼成良好 残存⅓

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
				部内面は横位・斜位ヘラ削り。	
第35図 9 SX14		底径 不明	底部片。平底。	外面ヘラミガキ，内面ヘラ削り。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
10 SX14		底径 6.5	底部片。平底。	調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存¼
11 SX14		底径 4.9	底部片。若干上げ底気味の底部から僅かに内湾気味に外上方に立ちあがる。	内面ヘラ削り，外面は調整不明瞭。	色調淡茶褐色 ～淡黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存底部完存
第36図 1 調査区	甕	口径 13.9 頸径 11.2	くの字状に強く屈曲する口縁端部を上方に肥厚させ，その端面は平坦におさめる。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面は肩部に不揃いの貝殻腹縁による斜位刺突文を一段めぐらす。その下位には縦位ヘラミガキあるいはヘラ状工具による強いナデを施す。胴部内面は横位ヘラ削り。	色調淡暗赤褐色 ～黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅙
2 調査区	甕	口径 16.6 頸径 12.2	頸部からゆるくくの字状に外反する口縁部で，その端面は平坦におさめる。	頸部内面は横位ヘラミガキ，その他は横ナデ調整を施す。	色調淡赤黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅙
3 調査区	甕	口径 18.2	口縁部は部厚く，ゆるく外反し，その端面は平坦に仕上げる。	頸部内面は横位ヘラミガキ，その他は横ナデ調整を施す。	色調淡赤黄褐色 胎土5㎜以下の砂粒やや多し。 焼成良好 残存⅙
4 調査区	甕	口径 12.0 頸径 10.4	ゆるやかにくの字状に外反する口縁端部を外方に僅かに肥厚させ，その端面をほぼ平坦に仕上げる。	口縁～頸部の外面には縦位の刷毛目あるいは板状工具によるナデ調整。その他は調整不明瞭。	色調明黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成やや不良 残存⅓～¼
5 調査区	甕	頸径 12.0	若干肩の張る胴部からくの字状に外反する薄手の口縁部をもつ。	口縁～頸部外面は横ナデ調整。その他は調整不明瞭。	色調淡赤褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅕

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
第36図 6 SB9	甕	口径 16.1 頸径 13.7	くの字状に外反する口縁端部を上方に若干肥厚させる。その端面は平坦に仕あげる。	口縁内面～頸部外面は横ナデ調整。外面胴部下半は縦位ヘラミガキ。胴部内面は斜位ヘラ削り。	色調茶褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存¼～⅕
7 調査区	甕	口径 16.1 頸径 13.5	若干肩の張る胴部から比較的強くくの字状に屈曲する口縁端部を上方に肥厚させる。端面には横ナデにより1～2条の凹線状の凹みをつくる。	口縁内・外面は横位刷毛目。外面胴部上半は横位刷毛目ののち横位ヘラミガキ，下半はヘラミガキを施す。胴部内面は縦位ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存⅙～⅕
8 調査区		底径 4.7	底部片。薄手の平底からひらき気味に外上方にほぼ直線的にのびる。	外面縦位刷毛目，内面ヘラ削り。	色調濃茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存½弱
9 調査区		底径 4.6	底部片。薄手の平底から外上方に立ちあがり，途中でさらに外反しながらのびる。	外面・外底面はヘラミガキ，内面は調整不明瞭。	色調黄褐色～淡褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存½強
10 調査区		底径 8.2	底部片。胴部との接合面でくびれる総高台状の平底をもつ。	内面縦位ヘラ削り，外面は調整不明瞭。	色調淡茶褐色～淡黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒多含。 焼成良好 残存½～⅔
11 調査区	壺	頸径 7.8	長頸壺の頸部か。僅かに外傾気味に立ちあがる。	外面縦位刷毛目（7～8条／cm)。内面上半は横位刷毛目，下半は縦ナデ。	色調淡赤黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存⅓
12 調査区	鉢	口径 15.8 頸径 14.1	最大径が肩部にあるために多少肩の張る胴部から，短かくくの字状に外反する口縁部をもつ。端部は上・下方に肥厚させる。端面は若干凹むが，ほぼ平坦に仕上げる。	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面はミガキ状，内面は横位ヘラ削りを施す。	色調黄褐色～淡 胎土比較的精良 焼成良好 残存⅙
13 調査区	高杯	口径 16.5	若干開き気味に外上方にのびる体部から，若干内傾するもののほぼ直立する口縁部をもつ。口縁部は部厚く，端部を若干内方に肥厚さす。口縁外面に5条の凹線を廻らす。	口縁内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は調整不明瞭。	色調淡赤黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存⅕

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
第37図 1 調査区	甕	口径 19.0	水平に近く屈曲してのびる口縁部で，端部を若干上方に肥厚させている。	調整不明瞭。	色調黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
2 調査区	甕	口径 19.2 頸径 16.7	くの字状に外反する部厚い口縁端部を，僅かに下方に肥厚させる。端面中央は若干凹む。	口縁内・外面～胴部外面は横ナデ調整。胴部内面は横位ヘラ削りを施す。	色調暗褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存1/6
3 調査区		底径 5.4	底部片。上げ底気味の平底。	外底面ナデ，内面ヘラ削り。外面は調整不明瞭。	色調淡黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存小破片
4 調査区		底径 4.6	底部片。若干上げ底気味の平底。	調整不明瞭。	色調暗茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒多含。 焼成良好 残存1/3
5 調査区		底径 7.8	底部片。平底。	調整不明瞭。	色調淡赤黄褐色～黄褐色 胎土1㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存1/3～1/4
6 調査区		底径 5.6	底部片。平底。	調整不明瞭。	色調暗茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒多含。 焼成良好 残存1/3～1/4
7 調査区		底径 7.8	底部片。若干上げ底気味の平底。	調整不明瞭。	色調暗灰色～黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒比較的多含 焼成良好 残存1/2強
第38図 1 遺跡周辺	壺	口径 19.9 頸径 7.8 胴部最大径 29.3 器高 35.8	若干上げ底気味の平底。胴部最大径が胴部中央より若干高位にあるが，ごく僅かに縦長の球状の胴部をもつ。頸部はかなりすぼまり，この頸部から口縁部が外上方に外反しながら立ちあがり，端部付近で	口縁内・外面は横ナデ調整。胴部外面上半～中位に縦位ないしは斜位刷毛目（4～5条／cm)，下半は，ヘラミガキ状の痕跡がみられる。外底面はナデ調整。頸部内面には僅かに斜位刷毛目の痕跡をとど	色調淡赤黄褐色 胎土3㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存口縁1/3，胴部3/4

挿図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	備考
			さらに外反し，水平に近くなる。端部を下方に肥厚させ，平坦に仕上げた端面の中央にはごく浅い凹線1条を廻らす。	をとどめ，胴部内面は上位が不定方向のナデ調整。中位は刷毛目，下位はヘラ削りののちナデ調整。	
第39図 2 遺跡 周辺	甕	口径 16.0	薄手の胴部からくの字状に屈曲する部厚い口縁部は，端面を平坦におさめ，端面中央に2条の凹線状の凹みが廻る。	口縁内・外面～頸部外面は横ナデ調整。胴部内面はヘラ削りを施す。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存小破片
3 遺跡 周辺	壺	口径 14.1	くの字にゆるく外反する口縁部で，その端面は平坦におさめる。	口縁内・外面の上半はやや粗い横ナデ調整。口縁内面下半はミガキ状の痕跡をとどめる。口縁外面下半は細かな縦位刷毛目(14～15条1cm)を施す。胴部内面はヘラ削りか。	色調淡黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存1/6
4 遺跡 周辺	壺	口径 10.8	直口壺の口縁部か。ほぼ垂直に立ちあがり，途中で若干外反し，端部は丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ調整。内面に指頭圧痕が残る。	色調黄褐色 胎土比較的精良 焼成良好 残存1/6
5 遺跡 周辺		底径 6.6	底部片。比較的部厚い平底から若干内湾気味に立ちあがる。	胴部外面は刷毛目調整（7～8条／cm)，内面ヘラ削り。外底面ナデ調整。	色調淡茶褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存底部完存
6 遺跡 周辺		底径 4.6	底部片。丸底気味の平底。外底面の縁辺に木葉痕が残る。外底面は使用に伴うと思われる磨滅が著しい。	外面ナデ調整。内面ヘラ削り。	色調淡赤黄褐色～黄褐色 胎土2㎜以下の砂粒を含む。 焼成良好 残存底部完存

3．まとめ

畳谷東遺跡は，広島市東郊の呉娑々宇山山頂から西方に派生する尾根上に立地する弥生後期の集落跡である。

本遺跡は，昭和48年に発掘調査が行われた県史跡畳谷遺跡[註]が立地する丘陵尾根と同一丘陵尾根上に立地しており，畳谷遺跡は本遺跡から約200m丘陵尾根を下った丘陵先端部付近に立地している。本遺跡と畳谷遺跡との間は未調査であるが，本遺跡の遺構のあり方からすると未調査の部分にも遺構が存在している可能性が十分考えられる。したがって，本遺跡と畳谷遺跡は一連の遺跡である可能性がある。畳谷東遺跡で検出した遺構は，概ね尾根頂部と南斜面下の２箇所に立地し，その内訳は，竪穴式住居跡10軒，土坑３基，性格不明遺構１である。ＳＢ１～ＳＢ５・ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＸ14が尾根頂部に，ＳＢ６～ＳＢ10・ＳＫ13は南斜面下に存在する。

住居跡の平面形は，円形３軒（ＳＢ１・ＳＢ４・ＳＢ５），方形あるいは隅丸方形４軒（ＳＢ２・ＳＢ７・ＳＢ９・ＳＢ10），不明２軒（ＳＢ３・ＳＢ８）である。主柱穴の数及び配置状況については，ＳＢ５が４本柱，ＳＢ３・ＳＢ９は２間×αの長方形ないしは方形に主柱を配したもの，そしてＳＢ４は建て替えを１度行っているために都合２度にわたって主柱を円形に配した上屋構造をもっていたものと推定される。壁溝については，ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ９の５軒についてはその存在が認められるが，残りの住居跡に関しては壁溝の存在はみられなかった。また，炉跡については焼土・炭の充満した炉穴は皆無であるが，ＳＢ４・ＳＢ10の床面では大形で浅い掘り込みを検出し，また，ＳＢ９の床面には２箇所の焼土・炭の集中部分が存在した。

遺物は，ＳＢ９・ＳＸ14を中心に弥生土器（甕・壺・鉢・高杯・手捏ね土器）・土製品・鉄器・石器が出土している。鉄器は用途不明のものでＳＢ９・ＳＫ13から各１点出土している。土製品・石器各１点はいずれも表土中よりの出土である。土器の大半は甕で占められており，甕はその口縁端部の肥厚の有無及び口縁端面における凹線文の有無などにより大きく３形態に分類できる。即ち，

１類……口縁端部を上方にのみやや顕著に肥厚させ，下方は丸くおさめる。端面には２～４条の凹線文が認められる（第27図２・３，第32図２，第36図１・６・７）。

２類……口縁端部を上・下方にわずかに肥厚させる。端面中央が横ナデにより大きく凹むが，凹線文は殆んど認められない（第27図1，第28図30，第35図4・7，第37図2）。

３類……口縁端部の肥厚は認められず，端面の凹線文は消失し平坦面となる（第27図４・５・６・７・９・10・11，第28図28・29，第35図５・６・８，第36図２・３・４，第37図１，第39図２・３）。

口縁部の調整は内外面ともに横ナデであるが，内面にヘラミガキを施すもの（第27図11），刷毛目の認められるものなどがある。口縁部外面の横ナデは，基本的に肩部付近にまでおよ

び，頸部でとまることは少ない。胴部内面は一様に頸部付近までおよぶヘラ削りを施しているが，一部にヘラ削りの上にヘラミガキを施すものもみられる(第27図10，第36図２・３)。頸部内面は，部分的なミガキないしはナデ状の調整を施すものが一部存在する(第27図３・４・10，第32図２，第36図５・７)。胴部外面は，ヘラミガキと刷毛目が認められ，前者が主として１類の甕に，後者は３類の甕を中心に認められる。肩部外面には貝殻腹縁・ヘラ状工具・櫛歯状工具による刺突文がやや顕著に認められる。その主体は貝殻腹縁及びヘラ状工具による施文で，前者は上下２列にくの字状に斜位刺突文を施すもの（第27図３・７，第32図２）と，１列のみ斜位の刺突文を施すもの（第27図11，第36図１）とがある。第35図１のみ壺であるが，残りはいずれも甕である。しかも，１～３類にわたってこれらの刺突文は認められるが，概して１・２類では整然とした刺突文で，３類では貝殻腹縁・ヘラ状工具による刺突文はいずれも乱雑・小形化しており，１・２類のものに比べ退化した状態を示していよう。次に，底部は甕・壺の明確な区別はつきにくい。よって一括して以下にのべる。図示しえた底部20例のうち，上げ底あるいは上げ底気味のものは８例，丸底気味の平底１例，平底11例である。底径は4.6～8.2cmの範囲におさまる。内面の調整はほぼ一様にヘラケズリだが，外面は平底のものが刷毛目調整とヘラミガキ調整の両方が認められるのに対し，上げ底のものはヘラミガキ調整が大半を占めている。

これら１～３類の甕を中心に構成される畳谷東遺跡の弥生土器の時期は，その口縁端部の肥厚，口縁端面の凹線文，胴部内面全体に及ぶヘラケズリ調整，胴部外面に施されるヘラミガキ・刷毛目調整，肩部外面の貝殻腹縁，ヘラ状工具による刺突文，などの形態・調整における諸特徴より弥生後期中葉を中心とした時期に求めることができよう。特に，甕については１類→２類→３類といった変遷が考えられ，中でも３類の甕は，口縁端部の肥厚の消失・口縁端面の凹線文の消失・肩部外面の刺突文の衰退・胴部外面の刷毛目調整の顕在化，などの諸特徴から弥生後期後葉にかかる可能性が考えられるが，いずれにしてもごく短期間での変遷としてとらえておきたい。

次に，本遺跡の集落構成について若干触れておきたい。住居跡10軒は大別して尾根頂部遺構群と南斜面遺構群に分れ，さらに切り合い関係・壁間距離などから各２グループずつ計４グループにまとめることができる。第１グループ(ＳＢ１・ＳＢ２)，第２グループ(ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５)，第３グループ(ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８)，第４グループ（ＳＢ９・ＳＢ10)である。各グループ毎に２～４回の住居の建て替えによる重複関係が認められる。このことは，各グループ毎に２～４期の変遷が考えられることを示していよう。しかし，これらの変遷から短絡的に，本遺跡が一つの集落として弥生後期中葉のごく短期間に２～４期の変遷を示したものだとは想定しえない。つまり，10軒の住居跡のうちで，出土遺物からその時期を明確にできるのはＳＢ９・ＳＢ10のみであって，他の８軒については明確な時期を呈示できない。

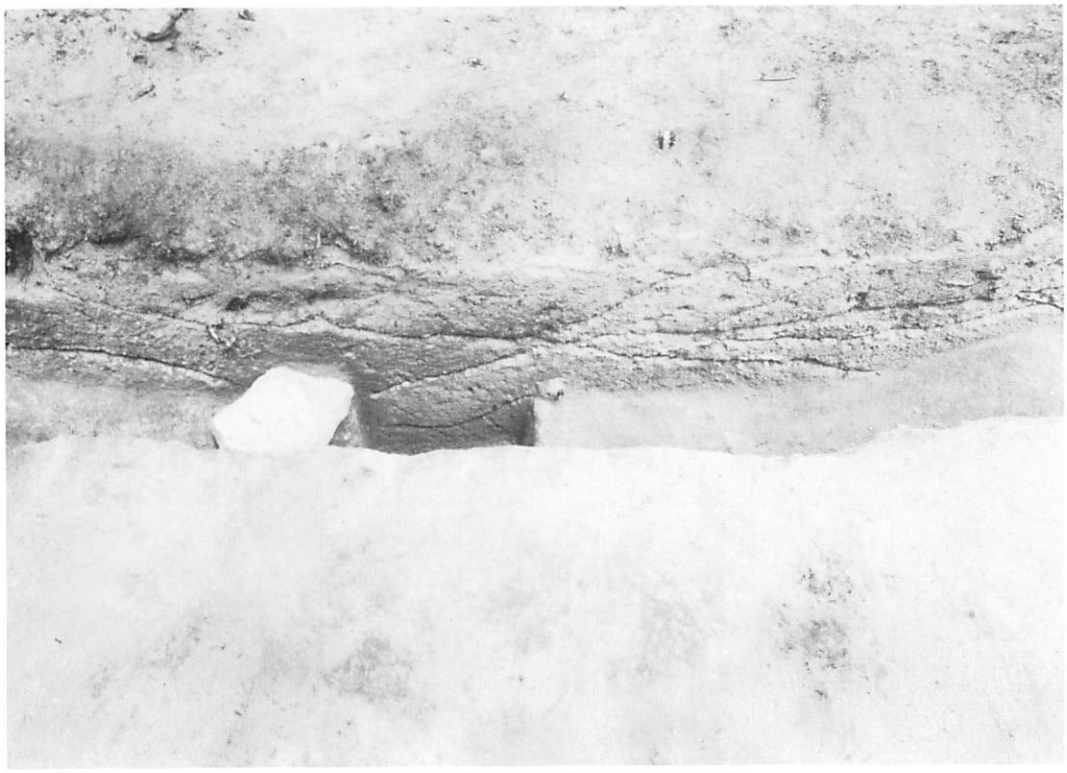
（註）　広島県教育委員会「畳谷遺跡」『広島県文化財調査報告』第14集　昭和58（1983）年。

図版 1

a　須賀谷古墳群遠景(南より)

b　須賀谷古墳群全景(調査前，南より)

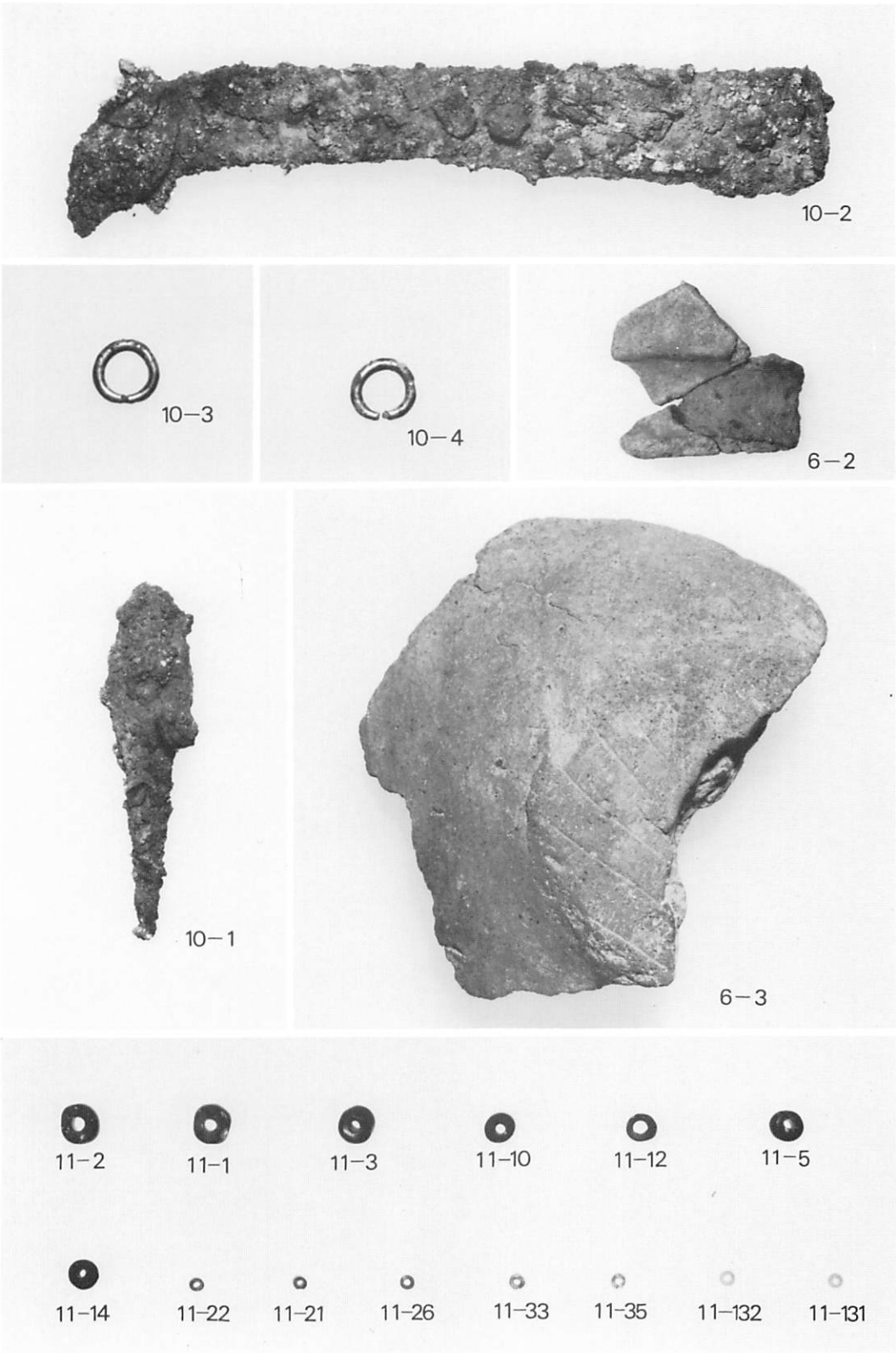
a　須賀谷第1号古墳全景(調査後，東より)



b　須賀谷第１号古墳周溝断面(南より)

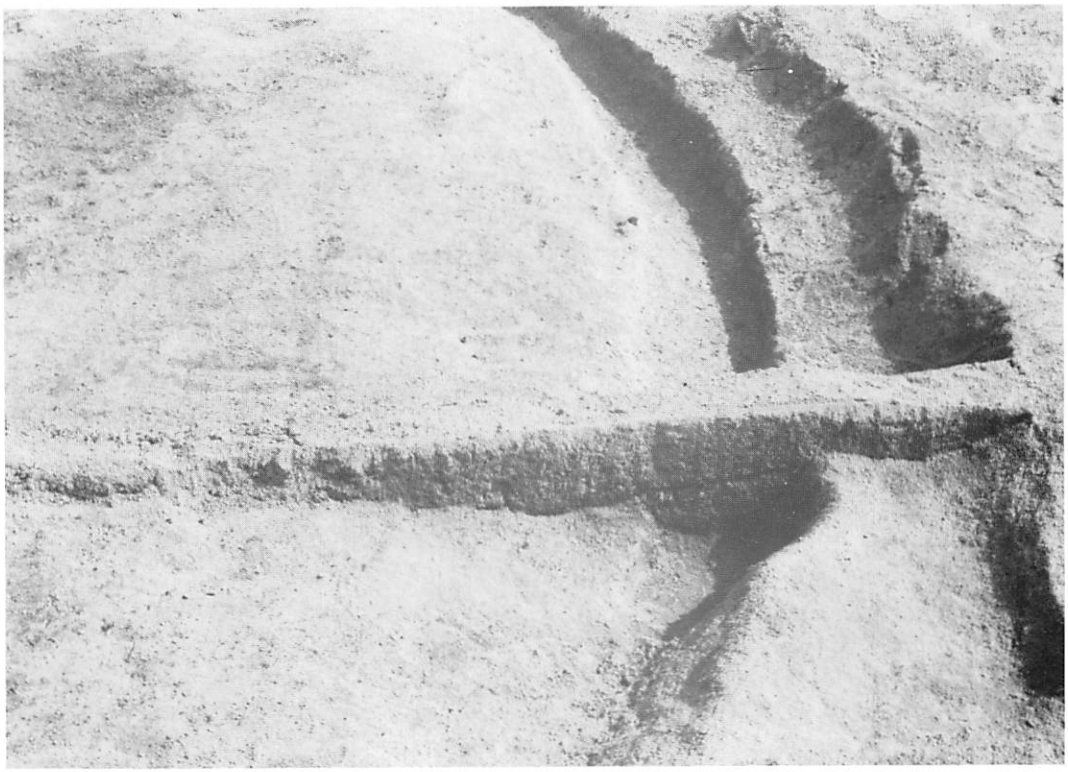
a　須賀谷第１号古墳主体部(北より)

b　須賀谷古墳群ＳＫ２(西より)



須賀谷第１号古墳出土遺物

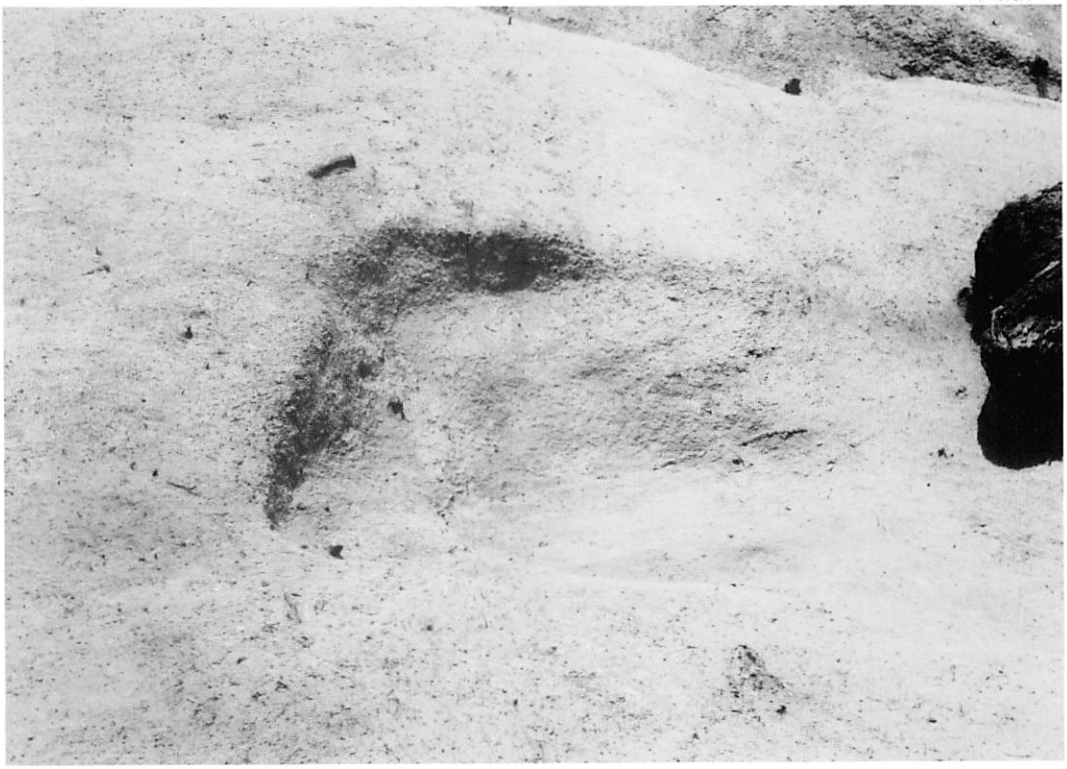
a　須賀谷古墳群ＳＫ１（北より）



b　須賀谷古墳群ＳＸ３（南より）

a　須賀谷第 2 号古墳全景(調査後，東南より)

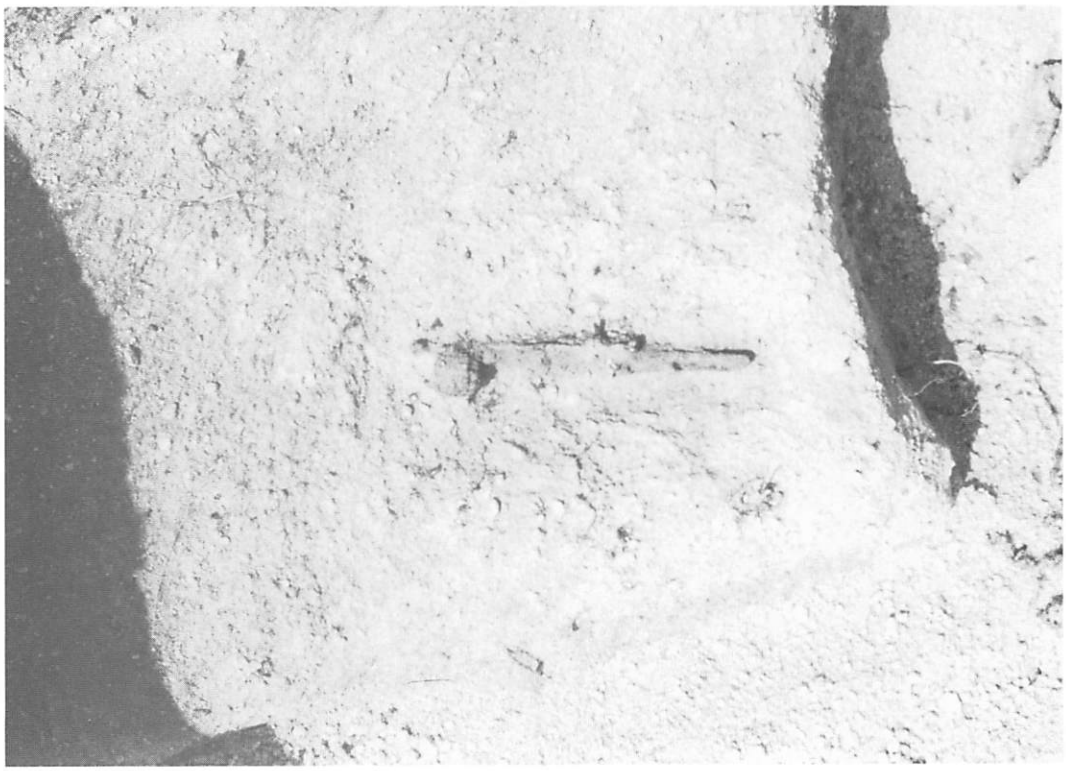
b　須賀谷第 2 号古墳周溝断面(西より)



a　須賀谷第２号古墳第１主体部(北より)

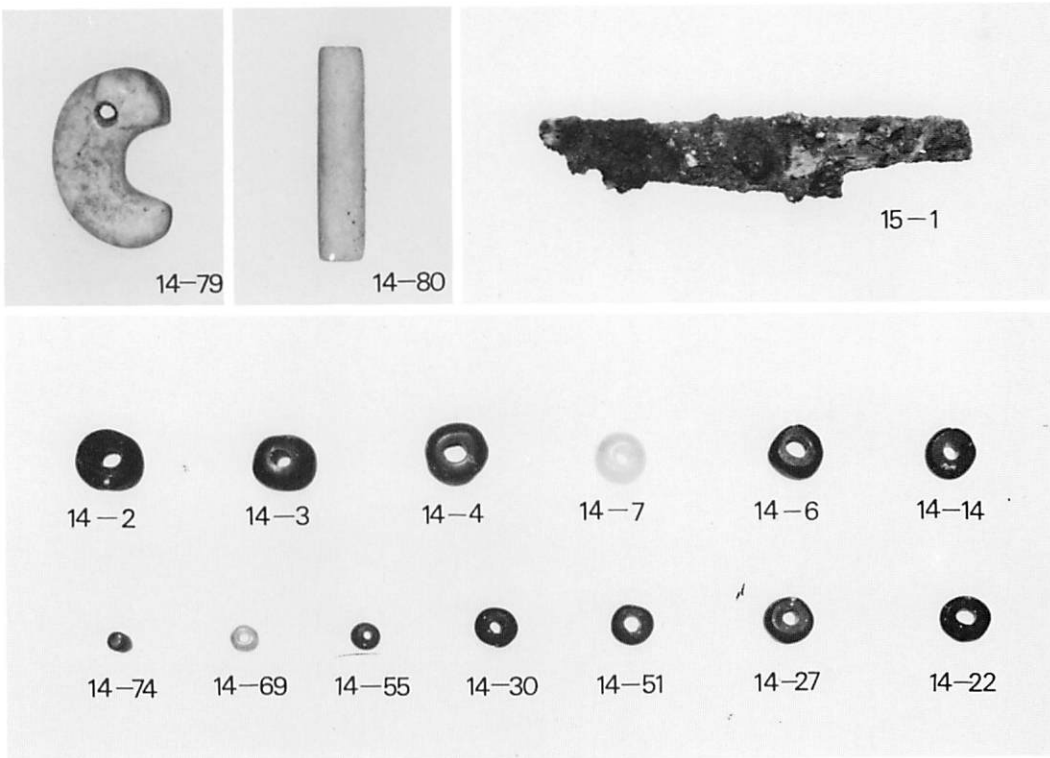
b　同　　上　玉類出土状況(北より)

a　須賀谷第 2 号古墳第 2 主体部(南より)



b　同　　上　鉄刀子出土状況(南より)

a　須賀谷古墳群ＳＫ４（北より）



b　須賀谷第２号古墳出土遺物

a　畳谷東遺跡遠景(西より)

b　畳谷東遺跡近景(調査前，西より)

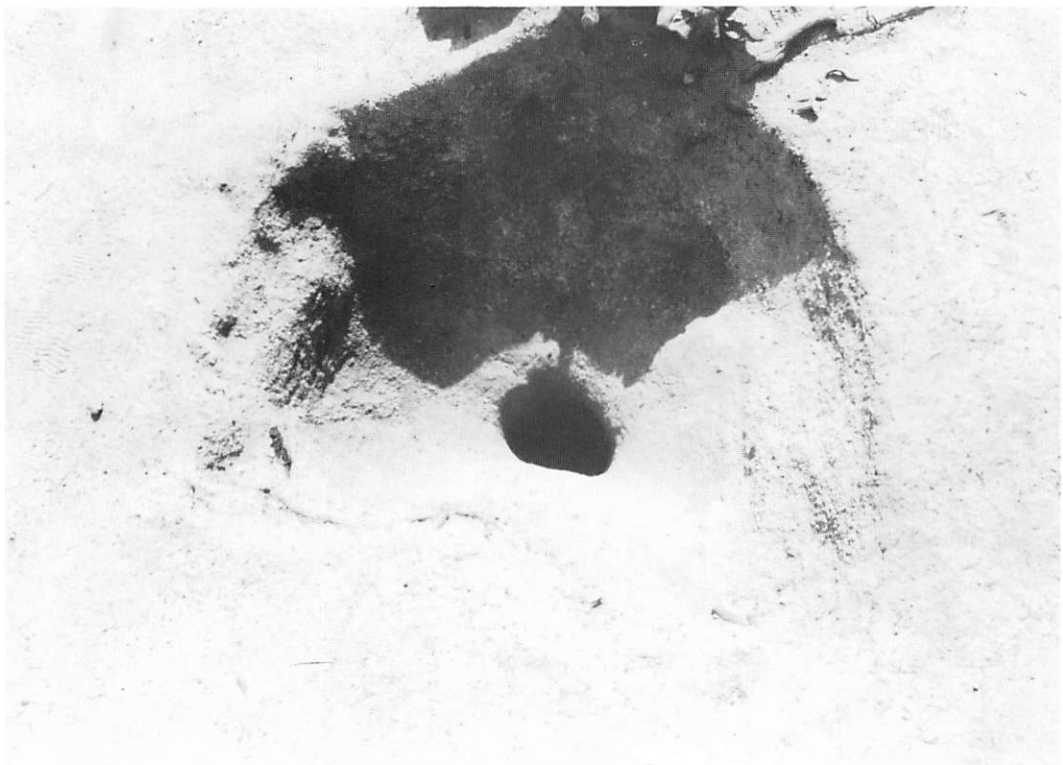
a　畳谷東遺跡ＳＢ１～ＳＢ５（西より）

b　畳谷東遺跡ＳＢ１・ＳＢ２（東南より）

a　畳谷東遺跡ＳＢ３・ＳＢ４(西より)

b　畳谷東遺跡ＳＢ５・ＳＫ12(西より)

a　畳谷東遺跡ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８(西より)



b　畳谷東遺跡ＳＫ11(南より)

a　畳谷東遺跡ＳＢ９・ＳＢ10(西より)

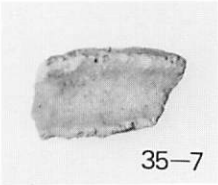
b　畳谷東遺跡ＳＫ13(西より)

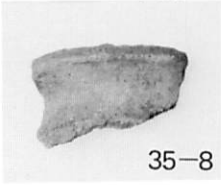
c　畳谷東遺跡ＳＸ14(北より)

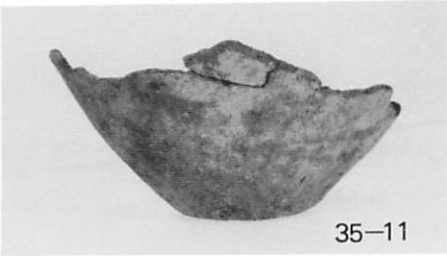
27−1
27−2
27−7
27−3
27−6
27−9
27−10
27−11
28−17
28−22
27−14
28−19
28−21
28−24
28−26
28−25
28−27
34−1

畳谷東遺跡出土遺物(1)

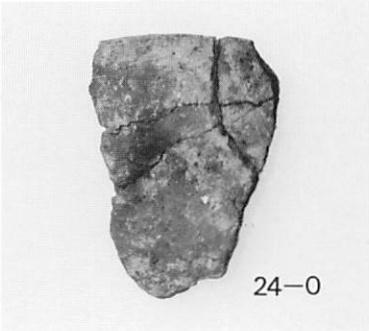
35−1


35−7


35−8

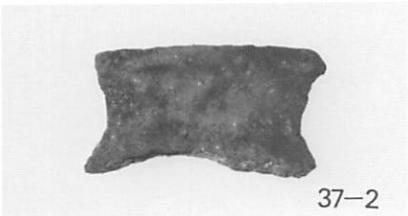

35−11

35−2

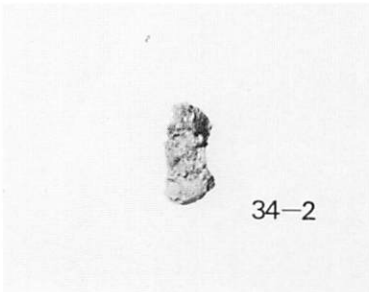

24−0

35−3

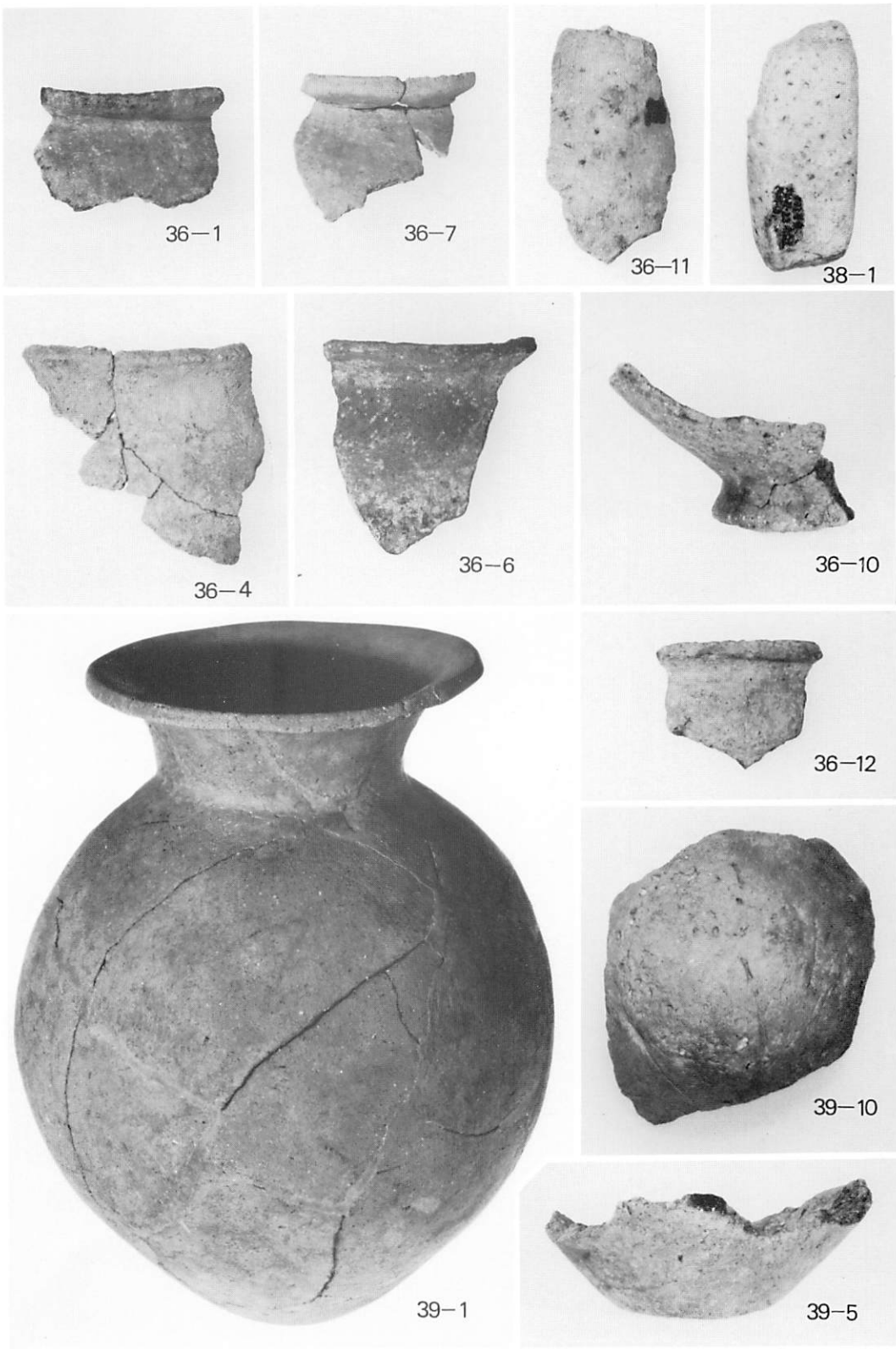
33−2


37−2

38−2


34−2

畳谷東遺跡出土遺物(2)



畳谷東遺跡出土遺物(3)

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集

須賀谷古墳群・畳谷東遺跡発掘調査報告書

発行日
昭和60(1985)年3月31日

編集・発行
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
734 広島市西区観音新町4丁目8-49
TEL(082)295-5751

印刷所
中本総合印刷株式会社